

D. C. Street. Runners. ～ダ・カーポ～ストリートランナーズ

ケンゴ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

夜中の峠道を愛車で走り、他車とのスピード競争に酔いしれる人種——走り屋。

常軌を逸した速度で後方へと流れていく風景は、常人にはもはや狂っているとは見えないだろう。

しかし彼らは、そういう行為でしか己を表せない——。

舞台となるのは、桜が1年中咲き誇っている不思議な現象で有名な“初音島”——。

その島内に位置する“初音山”に、今宵も走り屋たちは集い始める。

数多のエキゾーストノートが飛び交う初音山は、走り屋たちの楽園となる——。

.....

※登場人物と用語集は、物語進行状況に応じて、加筆更新していく予定です。

目次

設定

登場人物

用語集

初音島の走り屋

プロローグ

Act. 1	黒のGTO①	— 遭遇	11
Act. 2	黒のGTO②	— 出現	16
Act. 3	黒のGTO③	— 対戦	22
Act. 4	黒のGTO④	— 決着	30
Act. 5	邂逅	—	40
Act. 6	同型車①	— インプレッサ	46
Act. 7	同型車②	— 戦闘開始	50
Act. 8	同型車③	— 技術	55
Act. 9	同型車④	— 意地	60
Act. 10	同型車⑤	— 相違	64
Act. 11	同型車⑥	— 結末	69
Act. 12	遭逢	—	75
Act. 13	訪島者①	— 見学	81
Act. 14	訪島者②	— 前哨	85
Act. 15	訪島者③	— 察知	92
Act. 16	訪島者④	— 同業	96
Act. 17	訪島者⑤	— 格差	100
Act. 18	訪島者⑥	— 異色	105
Act. 19	訪島者⑦	— 奇術	111

設定

登場人物

ダ・カーポ 原作キャラクター

名前：朝倉 純一（あさくら じゅんいち） 男性

使用車種：MITUBISHI CE9A LANCER EV

0.3 GSR（ピレネーブラック）???PS

車のナンバー：初音 501 あ 12-281

プロフィール1：普段はチューニングショップ『初音オート』でメカニックをしている。音夢とは血のつながらない義理の兄妹。

意外と面倒見がよく、特に妹の音夢の事は気にかけている様子。学生時代は何をするのも腰が重く、そのたびに「かつたりい」という口癖を使っていたため、周囲からは「ミスターかつたるい」という不名誉なあだ名がつけられていた。現在ではそういったことも少なくなってきたが、やはり面倒事への腰の重さは相変わらずである。

メカとしては優秀なのだが、店の商品を勝手に車に取り付けたりするため、度々代表兼チーフメカのケンタにドヤされてる光景を見かけるとは、同ショップ勤務のことり談。ケンタからは「こういう時だけは腰が軽いんだよな」と皮肉られてるのだとか。

とはいえケンタとは仲が悪い訳でなく、むしろ学生時代は一緒にバカをやらかしていたほど親しい仲である。

その他の詳細は調査中。

プロフィール2：現在、調査中。

名前：朝倉 音夢（あさくら ねむ） 女性

使用車種：MITSUBISHI CP9A LANCER EV

0.6 GSR T.M.E.（スコーティアホワイト）320PS

車のナンバー：初音 310 ね 11-228

プロフィール1：普段は風見学園の救護教諭として勤務している。

純一とは血のつながらない義理の兄妹。

学生時代は看護師を目指して、風見学園付属部を卒業後は一人で島の専門学校へ入学し、初音島から離れていた。その後無事に卒業し初音島へと戻ってきた。

普段は温厚だが、怒ると別人のように怖くなるとか。純一曰く人当たりの良い「裏モード」があるとのこと。

また学生時代はしつかり者で世話好きでありことから「ミス世話焼き」のあだ名があった。純一が「ミスターかつたるい」と呼ばれているほどグータラしていたことも要因の一つのようだ。

家事万能と思いきや、料理だけは壊滅的にダメ。その腕前は焼き魚を作っていたら消防車が家にやってくるほど。「殺人シェフ」とは純一談。

その他の詳細は調査中。

プロフィール2：現在、調査中。

.....

名前：芳乃 さくら（よしの さくら） 女性

使用車種：現在、調査中。

車のナンバー：現在、調査中。

プロフィール1：教師として風見学園に勤務している。その他の詳細は調査中。

プロフィール2：現在、調査中。

.....

名前：白河 ことり（しらかわ ことり） 女性

使用車種：現在、調査中。

車のナンバー：現在、調査中。

プロフィール1：普段はチューニングショップ『初音オート』で事務作業と接客をしている。

学生時代は「風見学園のアイドル」として有名であり、もちろん初音山やショップでもその人気は留まるところを知らない。ケンタ曰く「ことりはショップの看板」だとか何とか。

近づきがたい高嶺の花のような存在だが、話してみると意外と気さ

くで茶目つ気のある笑顔を振りまいてくれる。特に接客をした客のリピート率が凄い。

チャームポイントであるベレー帽は大抵いつでも被っており、はっきり言ってよく目立つ。仕事中ですら被っているのは流石にどうかと思うが、もはや客からも容認されているレベルである。

彼女自身はメカニックではないが、ケンタや純一から車の触り方を教えてもらっており、オイル交換くらいなら簡単にこなせる。

その他の詳細は調査中。

プロフィール2：現在、調査中。

.....

名前：水越 萌（みずこし もえ） 女性

使用車種：SUBARU GDA-B IMPREZA WRX

NB-R（WRブルーマイカ）??PS

車のナンバー：初音 310 も 41-009

プロフィール1：『水越総合病院』にて勤務する医者。その他の詳細は調査中。

プロフィール2：現在、調査中。

.....

名前：水越 眞子（みずこし まこ） 女性

使用車種：SUBARU GC8 IMPREZA 22B ST

i-Ver（555ソニックブルーマイカ）380PS

車のナンバー：初音 310 ま 59-014

プロフィール1：『水越総合病院』にて勤務する医者。萌とは姉妹で妹。

音夢の親友で純一らとは学生時代のクラスメート。勝ち気で快活な性格で腕っぷしもかなりの物らしく、学生時代にバカをやっていた純一やケンタに何度か鉄拳を浴びせたことがある。もちろん仲が良く、気兼ねなく付き合える存在だからこそである。

またそんな性格からか、学生時代にはバレンタインデーで同性から大量にチョコを貰ってホワイトデーにお返ししていた。最近ではそういう事もなくなりつつあるとのこと。

初音オートに車を預けている祭は、姉のGDAインプレッサを拝借することが多い。

その他の詳細は調査中。

プロフィール2：現在、調査中。

名前：天枷 美春（あまかせ みはる） 女性

使用車種：HONDA DC2 INTEGRA Type-R
（バナナイエロー）280PS

車のナンバー：初音 510 み 60-316

プロフィール1：『天枷研究所』並びに『ER天枷（正式名称：Engineering ring. Amakase）』のスタッフ。その他の詳細は調査中。

プロフィール2：現在、調査中。

オリジナルキャラクター

名前：大城 剣太（おおしろ けんた） 男性

使用車種：TOYOTA ZZW30 MR-S（サンライトエロー）??PS

車のナンバー：初音 531 け 20-424

プロフィール1：純一らとは風見学園時代からの付き合い。仲間内からは『ケンタ』とカタカナで呼ばれることが多い。

初音島で唯一のチューニングショップ『初音オート（正式名称：HATSUNE AUTO）』の代表兼チーフメカニックである。

私事ですら他人事のように見てしまうほど、お気楽な性格。ただし仕事に対してはプロ意識を持ってしっかりと向き合っている。

仲間内では最初に初音山を走り始め、次々と周りを感化させて走り屋の世界に引き込んでいった張本人。

初音山で過去に一度、MR-Sの前に乗っていた車で全損クラッシュを引き起こした経験がある。

プロフィール2：現在、調査中。

.....

物語進行状況に応じ、随時加筆予定。

用語集

・初音オート（はつねオート）【建物】

正式名称は、チューニングショップ『HATSUNE AUTO』となり、代表者兼チーフメカニックは金城 剣太。初音島に位置する、島内最大の規模を持つ自動車ショップ。

また島内に存在する唯一のチューニングショップということもあり、初音島に在住する走り屋たち御用達のショップである。

エンジンスワップやボルトンターボ化などのハードチューニングから、ブーストアップやマフラー交換のライトチューンはもちろんの事、更にはカーナビ取り付けやオイル交換、果ては車検といった一般整備まで行うことができる。

優秀なスタッフも数多く在籍しており島内ではそれなりの知名度を持つが、島外での知名度は限りなく低いらしい。

・ER天枷（えんじにありんぐ・あまかせ）【ブランド】

初音島の研究機関である『天枷研究所』が展開するブランドであり、正式名称は『Engineerring. Amakase』となる。ロボット工学で培ったノウハウを応用し、チューニングカーのCPUセッティングを行っている。

初音オートがハードチューン車のCPUセッティングの依頼をする事から見ても、かなり信頼性の高い仕事であるということが伺える。

ただし、あくまでも本業は天枷研究所であり、ER天枷としての店舗営業はしていない。基本的には客自身からの個人的依頼を受けてからの作業となる。

・初音山（はつねやま）【地名】

初音島に中心部よりやや東に位置する、島内唯一の山岳。山頂からは海岸線と市街地が一望でき、咲き続ける桜の木とも相成り、島内有数の観光スポットとなっている。

山頂へ向かう道には、歩行者専用の登山道、もしくは軽車両を含む自動車および歩行者の通行が可能な『初音山ドライブウェイ』と呼ば

れる道路を使用することになる。

登山道と道路ともに道脇には所々に桜の木が植えられており、非常に景観が良い。島内、島外問わず多数の観光客が訪れる。

作中での『初音山』は、主に『初音山ドライブウェイ』のことを指している。

・初音山ドライブウェイ（はつねやま・どらいふうえい）【路線】
初音山に存在するワインディングロードであり、本作の主な舞台である。特別な場合を除き、作中での記載は『初音山』となる。

夜ともなれば島内の走り屋たちが続々と集まり、他車とのスピード競争に心を躍らせている。

低速、中速、高速コーナーがバランスよく交わっており、初心者から上級者まで楽しめる類稀なコースレイアウトとなっている。

島内唯一の走りスポットと言う事もあつてか、走る際のルールやマナーなどが島内の走り屋たちには浸透しており、非常に気持ちの良い走りを行うことができる。

たまに島外の走り屋が訪れることもあるが、島外での認知度は低い。

初音島の走り屋 プロローグ

1年中「枯れない桜」が咲き誇る初音島。

そんな不思議な桜を研究する人間がいる傍ら、初音島に居住する島民たちは至って平凡な生活を送っていた。

島民たちにとって枯れない桜は、あくまでも「普通の風景」として捉えられ、この島で生活する彼らにとっては特別に意識することでも無いからだ。

そんな不思議な初音島にも、車への情熱を持つ者達が居た。「走り屋」と呼ばれる彼らは、夜ともなると自慢の愛車を走らせ、他車とのスピード競争に心を躍らせる。

夜の「初音山」は島内の走り屋たちが一堂に介する絶好の走りスポットに化け、数々のドラマが生まれる舞台へと変わってゆく。

——しんしんと桜が舞っている。

——狂ったように舞っている。

——驚くほどゆったりと。

——音もなく。

——天使の羽のような花びらの散りぎまは、まるで永遠を思わせる一瞬。

——夜空に浮かぶ明るい満月に照らされ、花びらは煌びやかに舞い落ちる。

——ただただ静寂に包まれる真夜中の初音山。

——しかしそれが長く続くことは無い。

何故ならこの場所は、走り屋たちの樂園なのだから——。

「ああ……俺^{ポエマー}って詩人」

初音島に位置する、島内唯一のチューニングショップ

HATSUNE AUTO^{初音}のガレージ入口で、従業員の朝倉純一^{あさくら じゆんいち}が青空に向かって呟いた。

「訳の分からん事を言っていないでさっさと作業しろ」

そんな純一に向かって声をかけるのは、このショップのオーナーである大城剣太^{おおしろ けんた}。

手に客の車の資料と思われるファイルを持っている彼は、ガレージ奥の白い車を指さす。

「……かったりい」

「てめえ殴るぞコラ」

ため息をつく純一に、怒りの感情を表すケンタ。

「ほらほら、昼休みまであと少しだよ？」

壁にかかった時計を指さし、ニコニコしながら2人にそう言うのは、同じくこの店の従業員の白河ことり^{しろかわ}。

「その後も仕事だろうか……」

そう言う口調とは裏腹に満更でもない笑みを浮かべる純一。

学園を卒業して別れも少なくなかったが、やはり仲間が集まる環境は楽しい。

桜の花びらが舞う青空を見上げながら、ほんの少し先の未来を夢見た――。

— WARNING —

本作品は架空世界であり、現実世界とは一切関係は有りません。また登場する人物名や地名、及び団体名称も全てが架空の物で、完全なるフィクションです。

実車では作品中と同様の操作を真似しないで下さい。一般公道において、本作品に記載されている行為と同様の操作をしても、間違いなく事故を起こします。

一般公道では法定速度や道路交通法などを遵守し安全運転を心掛けますよう。

自慢の愛車を豪快に走らせたい場合、閉鎖された私有地やサーキット

トなどのクローズドコースでの走行をお勧めいたします。

Act. 1 黒のGTO① — 遭遇 —

深夜。初音山頂上の駐車場には、幾台かの車が止まっている。

「まだ来てないみたいだな……」

白色のランサーEvo. 6から降りてきた純一が、あたりを見ながら呟く。

「ったく。お前が家に乗って帰れば済む話だろうが？」

ため息を吐きながら、助手席側からはケンタが降りてくる。

「俺だってそうしたかったよ。けど、音夢あいつが走りたいって言うんだから仕方ないだろ」

純一もまた同様にため息を吐く。

「まあこれも仕事だから良いけど、どうやってここまで来る気なんだ？ まさか徒歩とかじゃねえだろうな」

「流石にそれは無いだろ。真子に頼むとか言ってたぞ」

純一がそう言うと、ケンタは驚きの表情を浮かべた。

「は？ ちょっと待て。真子の車って昨日入庫させたばかりだろ……」

「……そーいやそーうだったな」

2人の顔に嫌な汗が流れる。

「おいおい……マジで徒歩とかじゃねえだろうな」

「いや流石にそれは無い……と思う」

2人の頭に不安が駆け巡る。しかしそれは、聞こえてきたエンジンサウンドによって掻き消されることになった。

「この音……ボクサーサウンドだな」

「登ってくる感じだな」

徐々に近づいてくるエンジンサウンド。その音の持ち主は、暫くして2人のいる駐車場に現れた。

「あー、なるほどな」

ケンタがその車——青色のGDA—B型インプレッサを見て納得する。インプレッサはそのまま2人の前で停車した。

「遅いぞ」

「ごめんごめん。車のキーが見つからなくてさ」
愚痴る純一に対し、インプを運転していた水越^{みずこし} 眞子^{まこ}は手を合わせる。

「こんばんわ。すいません、無理言っただのに遅れてしまつて……」
「気にするなよ、一応はこれも仕事だからな」

ケンタにお詫びを言いながら助手席から降りてくるのは、エボ6のオーナーである朝倉^{あさくら} 音夢^{ねむ}。

「それじゃ、これが今回の作業記録書。あと車のキーと領収書な」
ケンタは数枚の用紙が入ったファイルとエボ6のキーを音夢に渡す。

「ありがとうございます。それじゃあ早速、試走してきますね」

「ああ。事故には気をつけろよ」

音夢は愛車のエボ6へと乗り込み、3人に見守られながら、ゆつくりと初音山へとコースインしていった。

「今回はどんな作業したの？」

眞子が2人に尋ねる。

「特には何もしてないな。精々オイル交換とアライメント調整くらいってところか」

純一がそう答えると、ケンタがジト目で純一を見る。

「特には」ねえ……お前、勝手にインテークパイプとブレーキパッド交換したろ」

「……何のことかな？」

純一は明らかに目をそらす。

「バレてねーとでも思ってたのか？ 給料からはキツチリ引いとくからな」

「なっ……!?!」

「ちなみに音夢ちゃんに渡した作業記録書と領収書にもばっちり記載してるからな」

悪い笑顔を浮かべるケンタ。完全なプライベート作業でなら工場の使用すらも気前よく許可する性格の彼だが、仕事となると話は別である。

「ったく。一声でも掛けてくれりゃあ、営業時間外に身内価格で作業してやるのによー」

「……すみませんでした」

ため息をつくケンタに、純一は静かに土下座する。

「まあそろそろ交換時期だったし身内の車だから、これ以上は何も言わねえけどさ」

「有難いお言葉を頂き感謝します」

「……なーにやってんだか」

純一とケンタのやり取りを見て、眞子が呆れ顔でそう呟いた。

「それで、アンタ達はどうやって帰る気なの？」

「俺は音夢と一緒にエボ6乗ってそのまま帰るぞ」

「んなもん、お前にシヨップまで乗っけてもらうに決まってんだろ？」

さも当然の如く2人は答える。純一はともかくケンタは完全に人任せである。先ほどまで純一に説教していたとは到底思えない返答だ。

「まあそんな事だろうと思っただけどね」

「察しが良くて助かる。んじゃ純一、また明日シヨップでな」

純一にそう言うと、ケンタはインプの助手席に乗り込む。

「じゃあね、朝倉」

「おう。気を付けてな」

眞子も純一に別れを告げてインプに乗り込み、車を発車させて彼のもとを後にした。

その後ゆっくりとしたペースで初音山を下るインプ。その車内ではケンタと眞子が談笑している。

「それでよー……ん？」

暫く笑いを交えながら眞子と話していたケンタだが、ふと訝しげな眼をしてサイドミラーを覗き込む。

「なに、どうしたの？」

「直線で速い車が1台追いついてくるな、ハザード出してパスさせとけ」

ケンタにそう言われて眞子もバックミラーを覗き込むと、そこには

後方から追いついてくるヘッドランプが映っていた。

眞子は彼の指示通りハザードを出して緩やかに減速して車体を左に寄せ、明確な意思を持って進路を譲る、いわゆる「お先にどうぞ」のサインを示す。このサインを受けた場合は、パッシングを行った後ハザードを出しながら追い抜いて行くのが、初音山の走り屋の間には深く浸透している。

しかし、今回後ろから迫ってきている車は勝手が違った。そのままインプの後ろに留まり、短いパッシングを数回行う。

「おいおい、バトル申し込みサイン出してるぞ」

「こっちはハザード出して減速してるんだから、その意思は無いってことくらい分からないのかしら？」

眞子はそのままハザードを出し続けるが、後ろの車はお構いなしにパッシングを続けてくる。お世辞にもマナーの良い走りとは言えない。

「いい加減にしてほしいわね……」

眞子は呆れた顔で、インプを路側帯へ放り込み完全に停車させると、今まで後ろにいた車——黒色のミツビシ GTOはようやくインプを追い抜いて行った。

「……島外ナンバーか」

ケンタが追い抜いて行ったGTOのナンバーを見て呟く。

「まったく。何なのよあの車」

「まあまあ、あんまり気にすんなよ」

不機嫌そうにGTOに対して言葉を言い放つ眞子をなだめるケンタ。

「今度会ったら叩きのめしてやるわ」

「お前の場合はリアルファイトになりそうだから止めとけ」

割と本気でそう願うケンタ。眞子はそんなことしないわよ、と言いたげな表情で彼を見る。

「それより早く帰ろうぜ、萌先輩だって車が無いと不便だろ」

「正直言うと、あんまり車運転させたくないんだけどね……すぐ寝ちゃうし」

ため息を吐きながらも眞子は運転席に戻り、ケンタも助手席に乗り込むと、インプは初音山を下って行った――。

Act. 2 黒のGTO② —出現—

「そっぴいやし、黒色のGTOの話知ってるか？」

初音オートの昼休み。ケンタ、純一、ことりの3人が、いつものように集まって昼食をとっていた最中、純一がふとそんな話題を口にした。

「黒色のGTO？ うーん、聞いた事ないなあ」

「ことりがそう言うのと、純一が話を進める。」

「なんか手当たり次第に、初音山を走ってる連中にバトル吹っかけてるみたいなんだよ」

「ほう。それで？」

何かを思い浮かべた表情でケンタが相槌を打つ。恐らく昨晚出会ったGTOを思い浮かべているのであろう。

「俺も少し前から音夢から話を聞いてただけど、あんまりマナーが良くないみたいだな。バトル意思の無い車や、あまつさえ一般車まで煽り倒す奴みたいなんだよ」

「うわー。あんまり会いたくないね」

「だな。迷惑な事この上ない」

何も知らないことりは若干引き、ケンタはことりの言葉に同意する。確かにあまり会いたくない部類の輩である。

「それでさ。昨日の夜ケンタと眞子が帰った後、音夢を待ってたらそのGTOを駐車場で見ただよ。それでそのGTOのドライバーが『この峠で最速の奴は誰だ？』って大声で叫んでさ」

「へえ、えらく挑発的な奴だな。初音山の制圧でも狙ってるのか？」

「口振りからするとそんな感じがするねー」

ケンタとことりが小さく笑う。2人ともまったく相手にしていない顔であるがあるが。

「そしたら駐車場にいた何人かが、初音オートの車が速いってそいつに言ったんだよ。だからちよつと気を付けたほうが良いなと思ったんだ」

初音オート的車、というのは恐らく初音オートのステッカーを貼つ

た車ということだろう。

「なるほどな。だから昨日、眞子に絡んできたのか」

ケンタが納得した顔をする。初音オートで作業した車——特に彼らの身内の車——には何処かしらに初音オートのステッカーが貼っており、あのGTOは眞子が運転していた萌のインプに貼ってあったステッカーを見つけたのだろう。

「え？ ケンタ君、そのGTOに会ったの？」

「ああ、たぶん純一がGTOを見た直後だろうな。こっちが減速して進路譲ってんのにずっとパッシング続けてたな。最後は路肩に車止めてやり過ぎたけど」

「やっぱ噂通りの走りなんだな。何にせよ、ちよつと気を付けたほうが良いかもしれないな」

純一がそう言つてパンを頬張り、この話題は終了となった。

「さて、昼休みもそろそろ終了だね」

「昼からも頑張つて仕事しろよ」

時計を見ながら、こつりとケンタが純一にそう言った——。

「お疲れー」

営業終了時間となった初音オートのスタッフ達が帰り支度を始める。

「おーい、2人ともこのあと暇か？」

そんな中、純一がケンタとこつりに声をかけてくる。

「特に用事はねえけど、何だ？」

「一緒に初音山行かないか？」

そう言つて愛車のキーを見せる純一。

「黒いGTOを見に行くつてか？ “ミスターかつたるい”のお前にしては珍しいな」

「実は音夢と眞子が山に向かつてるらしくてな」

純一が携帯のメールを見せる。

「でもでも、どんな人なのかは気になるよねー」

「こつりも意外と野次馬根性あるよな」

純一は素で突っ込む。とは言え2人に断る理由も無いのでそれを承諾。3人は駐車場へと向かっていく。

「そういえばケンタ君は、噂のGTOを見たんだよね。どんな車だったの?」

「デカいリアスポ付いてたから、最終型のGTOだろうな。純一が話してた通り、ルール無用というかマナーが欠落してるというか……まあ走ってる途中には絶対に会いたくないな」

「でも初音山最速の人とバトルしたがつてるんだよね。ということは走りのほうは相当なんじゃないのかな?」

「どうだろうな。あんまり大きいこと言う輩に限って自信過剰なのが多いからなあ」

暫くして純一の愛車の前へと到着。3人は車へと乗り込むと、初音山へと向かって行った――。

――同時刻、初音山頂上駐車場。

「今夜の話聞いているか?」

「聞いている聞いている。あのGTOと初音オートが走るんだろ?」

「そうそう、しかも代表の大城が走るらしいぜ」

「マジで? MR―SとGTOなんて勝負になんねーだろ」

今夜の初音山には、普段よりも多くの走り屋が集っている。彼らの間には『黒いGTOと初音オートがバトルする』という噂が飛び交っており、今夜集まった走り屋はギャラリーしに来た者が大半だ。

「何時の間にこんな話題になったの?」

「うーん、噂ってのは広まるのは早いからね」

駐車場の隅に止まっている白いエボ6の傍で、真子と音夢が遠巻きに走り屋たちを見ている。音夢のエボ6にも初音オートのステッカーは貼ってあるが、隅のほうに停車しているので目立つことはない。

「こーゆー時に車があったら、さっさとあたしがバトルして噂を無くしてやるんだけど」

自分の車が無いことを嘆く真子。現在、彼女の愛車は初音オートに

預けており足回りの調整中である。本当は既に作業済みで直ぐにでも引き渡せる状態なのだが、噂になっていてGTOの件が一段落するまではケンタの計らいによって納車待ちとなっている。

「まあまあ。いま兄さんから仕事終わってこつちに向かっているって言うメール来たし、もう暫くしたら来ると思うよ」

眞子に携帯を見せてそう言う音夢。

「でも本当にケンタが走るのかしら？ 昨晚そのGTOを見たばかりだって言うのに」

「あくまでも噂だからねえ。初音オートの手つてなれば、必然的にケンタ君のMRSになるだろうし……」

「どういう基準で言ったか知らないけど、初音オートに出入りしてるあたし達からしたら迷惑な話よね」

自分の車がまだ納車されない理由を作った噂のGTOに対し、眞子はご立腹の様子だ。まだ姉のインプレッサを引っ張り出してこないだけマシと言えばマシなのだろうが。

「とりあえず、兄さんたちが来るまで待とうよ」

音夢がそう言い、彼女たちは駐車場の方を見つめた。

——数分後。

「おー、いっぱいギャラリーが出てるな」

初音山を登り切り、駐車場へと入ってくる黒色の車——ランサーEvo.3。純一の愛車であるその車のリアシートに身を沈めているケンタが、駐車場に立っている数多の人々を見て呟いた。

「珍しいね、こんな集まっているなんて」

ケンタの声に反応したのは、助手席に座ることり。

「普段はもう少し静かなのにな」

運転する純一も、今宵の初音山に出てきているギャラリーの数に驚く。普段からこの初音山を走る3人だが、ここまで初音山に人が集まっているのは、あまり見たことがなかった。

「えっと、音夢の車は……。お、居た居た」

駐車場の隅の方に停車している、妹の車を見つける純一。そのまま

そちらの方へと車を移動させ、隣に停車させた。

「あ、兄さん」

「よう。眞子も一緒か」

音夢の隣にいる眞子に言葉を向ける純一。

「こんばんわ、音夢さん。水越さん」

「白河さんも来たんだ」

助手席から降りてきたことりに、挨拶を交わす眞子。

「黒色のGTOに興味があるのは純一だけじゃ無いってか」

「え？ ケンタが何で居るのよ!?!」

眞子が驚く。音夢も驚いた表情を見せており、ケンタは少し表情をムツとさせた。

「なんだよ、まるで来ちゃダメだったみたいじゃねえか」

「いや、アンタ今日、噂の黒いGTOとバトルするんでしょ?」

「はあ? 何言ってるんだよ?」

ケンタは眉をしかめる。

「でも走り屋中で噂が飛び交ってますよ? 初音オート代表が黒いGTOと一緒に走るって……」

「誰だよ、そんなアホみたいなデマ流した奴は。そんなもんオレは知らん」

きっぱり否定するケンタ。やはりただ単に噂話だけだったようだ。

「なんだ、やっぱりただの噂かあ。心配して損しちゃった」

「大体、なんでオレがあんなヤツとバトルしなきゃなんねーんだよ」

「それもそうか」

眞子が苦笑する。風見学園時代からつるむことが多かった、この場にいる5人。皆それぞれ、各人の性格は把握しているつもりだ。

「で、例の黒いGTOは来てるのか?」

「まだ姿は見えてないわ。ま、この様子だとすぐ来るんじゃない?」

眞子がそう言った、その瞬間。駐車場入り口から、走り屋たちのぎわめきが聞こえてきた。

「どうやら、目当ての車が来たみたいだな」

ケンタがそう言うと、彼ら5人は駐車場入り口の方へと向かって

い
っ
た
—
。

Act. 3 黒のGTO③ —対戦—

「あれが噂のGTOか」

純一がそう言いながら、駐車場に止まった黒色のGTOを見る。えらく厳ついエアロパーツで武装されており、車体の大きさと相成りかたりの威圧を感じる。

「初音オートの代表ってのは誰だ？」

そのGTOから降りてきたドライバーがそう問う。すると、周りの走り屋たちは一齐に、ケンタら5人の方を見た。それを確認すると、GTOのドライバーは5人の元へ歩み寄ってくる。

「おまえらが、ココで最速の人間か？」

「最速ねえ……」

気怠そうにケンタがポリポリと頭を掻き、そしてほかの4人を見る。

「別にオレらは最速を名乗ってるわけじゃねーが。まあ初音オートの人間かと聞かれたら、イエスと答えるけどな」

「なら話は早い。お前らの中で一番速いやつが俺とバトルしろ。俺がバトルで勝った時は、俺の車を見かけたときに無条件で道を開けてもらおうか」

ニヤリと笑みを浮かべるGTOのドライバー。その様子を見たケンタは、更にやる気を無くす。

「正直あんたみたいなのが絡んでくると、こっちは迷惑なんだよね。大した腕もない癖に意気がってさ」

「なんだと？」

GTOのドライバーの表情が険しくなる。ケンタの言葉に、多少イラついたようだ。

「ハッ！ バトルすら受けられないような臆病者にそんなこと言われるとは……傑作だぜ。まあこんな僻地に速いやツなんて居ないと思うけどな！」

「……それなら試してみますか？」

少し怒気を混じらせた声でGTOのドライバーにそう言ったのは、

音夢だった。

「なんだ、女が相手かよ。悪いがオレは遅いやつに興味ない——」

「逃げるんですか？」

「なんだと……？」

GTOのドライバーの言葉に被せ、音夢が挑発を投げる。両者とも、お互いの顔を見る。一触即発とはまさにこのことだろう。

「良いだろう。さっさとてめえの車をスタートラインに並べな！」

GTOのドライバーはそう言くと、自分の車へと乗り込む。

「この峠は、この俺——もりやま しゅうじ森山 修司が手中に収める！」

「ふふっ、弱い犬ほどよく吠えるんですよ？」

最後まで挑発する音夢。彼女もまた、自分の愛車に乗り込んでスタートラインへと着くのが嬉しかった。

「なんか妙なことになるってきたね」

「まさか音夢が走るようになるなんてね」

「まあ、どんな走りをするか見せてもらおうじゃないか」

「……なんでお前ら、俺の車に乗ってんだよ」

スタートラインにつく、音夢の白いエボ6と森山の黒いGTO。そしてその2台の後ろに停車する、純一の黒いエボ3。

「いやー。こういう時、後ろにシートがある車は便利だよなー」

「人の話聞けよ」

純一がエボ3のリアシートでくつろぐケンタに突っ込む。現在、純一のエボ3には助手席に眞子、リアシートにケンタとことりが乗っている。

「気にすんなよ。どうせなら2台の後ろを追っかけたほうが楽しいじゃねーか」

「ほぼフル乗車の状態で、下りの追走なんか出来るか！」

「聞こえない聞こえない。ほら、前の2台がスタートしたぞ！」

「あー、もう！」

エボ6とGTOのスタートを見届けたケンタの声に促され、純一はヤケクソでエボ3をスタートさせた。

・バトル車両・

MITSUBISHI LANCER EVO. 6 (朝倉 音夢)

—V.S— MITSUBISHI Z16A GTO (森山 修司)

・バトル追走・

MITSUBISHI LANCER EVO. 3 (朝倉 純一、

水越 眞子、白河 ことり、大城 剣太)

バトルコース「初音山・下り・夜・晴れ」

バトルBGM「Express Love (頭文字D ARCADE

E STAGE Ver. 3参照)」

「始まったぞ！ どっちが先行だ!？」

バトルが始まりスタート地点でざわめきギャラリィたち。初音山のスタート地点から第1コーナーまでの距離は凡そ300m弱の長い直線。

「先行は——GTOだ!」

スタートラインをほぼ同時に飛び出した2台だったが、前に立ったのは森山の黒いGTOだった。第1コーナー突っ込みまでに、完全に音夢のエボ6の前へと出る。

「流石は鬼トルクのGTOね、車重の重たさを感じさせないわね」

眞子が助手席でそう言うと、すかさず純一が突っ込む。

「ただ音夢の奴が、本気でアクセル開けてたかどうか怪しいけどな」

「そうだな。GTOとエボ6TMEの車重差は300キロ近く、そしてトルクはGTOが44キロ弱でエボ6が38キロ。いかにGTOが鬼トルクとはいえ、やっぱり300キロ近くの車重差を簡単に覆せるほどじゃあない」

もちろんノーマル状態での話だけどな、とケンタは付け加える。音夢のエボ6はともかく、相手のGTOも全くのノーマル車両とは考えにくい。

「まあバトルはまだ始まったばかりだ。どうなるか分からないさ」

エボ3に乗っている全員が、前を走る2台を見た——。

スタートして、エボ6の前へと出るGTO。もうすぐ第1コーナーである、緩やかなS字コーナーが見えてくる。セオリー通り、アウト側からパーシャルスロットルで進入するGTO。後ろを走るエボ6も同様だ。

無難にS字を立ち上がり、続いて2台に迫りくるのは左の複合ヘアピンコーナー。コーナー中腹から出口にかけて、入口よりも曲率がきつくなっており、見た目以上の減速が必要なポイント。

GTOがまずブレーキングを開始。重たい車体を止めるための強力なブレーキで減速し、そのままステアを曲げていく。次いでエボ6のブレーキング。GTOと比べて軽量な車体ではあるが、ここでは無理せずにGTOのラインをトレースしてコーナーを駆け抜けていく。「やっぱりブレーキと旋回じゃ、こっちの方が有利だね……」

前を走るGTOよりも余力を残したブレーキング。そして音夢の操るエボ6が所属する第2世代ランエボシリーズ最大の特徴——アクティブ・ヨー・コントロール
A Y C システムを効かせ、よりシャープなコーナーリングが実現する。

GTOが先行のままコーナーを立ち上がって加速する、しかしエボ6もしつかりとその後ろを追走している。

「思ってたよりはやるな」

森山がGTOの車内で吐き捨てる。バックミラーに映る白色のエボ6を見て、そして再び前を見る。次は右コーナー。上り車線に登坂車線が存在するので、このコーナーは3車線分のコーナーリングラインを描ける。

GTOは一気に車体をイン側へと寄せていくが、エボ6は少し余裕を持たせて道幅のセンターを中心にしてのコーナーリング。ここから少し直線が現れるが、そのあとは低速のヘアピンカーブが連続するテクニカルセクションとなる。

「ここはタイヤを温存だね」

バトルはまだ始まったばかり。これからの勝負を考え、音夢はタイヤを温存する走りに切り替える。全幅の大きいGTOが前に居ては、

追い抜くのにもかなり神経を使う。ならば様子見だと、音夢はそう考えた。事実スピードは乗っている、あとは相手の出方次第だ。

「手堅い作戦だな」

「そうだね、前を走るのが大きい車だとちよつと慎重になつちやうよね」

エボ3のリアシートで、ケンタとことりがエボ6の動きを見てそう言う。普通ならば、このポイントはGTOのように一気にイン側へと寄せていくのがベターだ。

「対向の登板車線を含めて3車線あるから、ぶつかるとはまず無いんだけどな」

「頭ではわかってても、やっぱり躊躇うよな。流してる時に追い越す分には、簡単にいけるんだけどな」

ステアを握る純一がケンタに返答する。エボ3のフロントスクリーンには2台のテールを捉えているが、バトル開始直後とはいえフル乗車に近い状態では、流石に全開走行をする前2台に追い越すことは難しい。徐々に2台との距離は遠くなりつつあった。

バトル中のGTOとエボ6は低速コーナーが続くテクニカルセクションへと突入していく。その大きな車体と道幅いっぱいのコナリングラインを活かし、エボ6へのブロックラインを走行するGTO。

「そんなにインを締めなくても、ここで行く気は無いですよ……」

音夢は車内でそう呟きGTOを追従する。この走り慣れたコースで、GTOよりもシビアなラインでコーナーを駆けるエボ6。ブレーキングへの入力もGTOに比べれば非常に滑らかだ。

「ちつ……切り返しが多い区間だな……」

忙しくステア舵角を修正しながら、森山は悪態をつく。エボ6よりも遙かに大柄な車格を持つGTOの左右への動きは、はつきり言うてダルい。特にこんなテクニカルセクションであれば尚更だ。

しかし少なからずブロックラインを走行しているので後ろのエボ

6に追い抜かれることはまず無い。とはいえ、後方を走る音夢に追いつき抜きの意志が無いので、当然といえば当然なのだ。

「やはり、その大きな車体ではこの区間はキツそうですね」

GTOの動きが苦しいのは後ろから見ていると分かる。道幅いっぱいのコーナーリングラインとブロックラインで誤魔化しているが、エボ6よりも加速減と左右旋回の動きが大きい。

(でもまだ我慢)

このテクニカルセクションの終わりを告げる、S字コーナーから続く低速左ヘアピンコーナーへと2台は進入。やはりGTOはブロックラインを走行し、少し強引とも見えるイン側への寄せ方をする。それに対しエボ6はクリップポイントに付くタイミングを遅らせ、コーナー出口でより多くアクセルを開けることができるコーナーリング。

「くっ……！」

コーナー立ち上がり。GTOの真後ろに、ぴたりとエボ6が張り付く。脱出速度はほぼ直角、そしてこの後は曲率が不規則に変化する左右の高速コーナーが連続し、更に途中には低速ヘアピンが存在する区間——通称「初音ワインディング」と呼ばれる、この初音山で最も高難度のセクションが現れる。

(旋回能力はランエボの方が上だが……)

森山はバックミラーに映るエボ6の姿を気にしつつ、ステアを進行方向へと切り込んでいく。

(こんな曲がりくねった区間での追い抜きはありえねえだろ！)

シフトレバーを3速へと叩き込みシフトダウン。エンジンブレーキを微妙に効かせながら連続コーナーリングを開始するGTO。そしてエボ6も初音ワインディングへと進入し、バトルは中盤戦へと突入して行く。

「流石にもうキツイぜ、タイヤが鳴き始めてきた」

追走するエボ3のステアを握る純一の手が忙しく動く。フロントタイヤからの手応えが薄い。

「朝倉君、無理しなくていいよ」

後ろからことりが純一に声を掛ける。エボ3の挙動が徐々に緩慢になっていくのが感じられたからだ。

「そうだな。あのGTOの実力も大体わかったことだし、クーリング走行に入ろうか」

「ああ、そうさせて貰うぜ」

アクセルペダルから足を離し、エンジンブレーキを効かせる純一。前を走っている2台の姿は、あつという間に彼方へと消えていく。

「勝敗の行方は見えたしな——」

エボ3のリアシートで、ケンタが小さくそう呟いた。

「振り切れねえ……」

前を走るGTOの背中に、ピタリと張り付いて追走するエボ6。GTOの走行ラインをトレースし、森山にプレッシャーを与える。

（俺のGTOより、エボ6の旋回能力が良いのは分かるが……ここまですぐ追い回されるもんなのか!?!）

バックミラーに映るエボ6の姿を確認する森山。右へ左への高速コーナリングを続ける2台だが、その動きは両者で異なっていた。

（くっ……！ クリップにつくのが、向こうに比べてワンテンポ遅れちまう……!）

ケンタも純一らに説明していたが、GTOとエボ6とのノーマルでの車重差はおよそ300キロ。エボ6に比べるとステアの切り返し時の反応はイマイチであり、さらに高速でコーナリングを繰り返しているのだから尚更である。

（もうすぐこの区間も終わる……その後は低速ヘアピンが2つ3つ続いた後、アクセルを踏める区間になる。そこで一気に突き放してやる!）

乱暴にシフトレバーを3速へと叩き込み、そしてGTOが連続高速コーナー区間を抜ける。

（この後にくっ低速ヘアピンを抜けるとストレート区間……向こうのGTOのパワーがどれだけ出てるか分からないけど、こっちの戦闘力

なら食らいつけるはず)

GTOのテールを見据える音夢。そして2台の眼下に、右ヘアピンカーブが迫ってくる。まずGTOのブレーキランプが点灯、続いてエボ6のブレーキランプも点灯する。一気に車体をイン側へと寄せるGTOとエボ6、理想的なコーナリングラインを描いてコーナーを立ち上がる。少し間を置き続いて現れるのは左ヘアピンで、そして間髪入れずに右ヘアピンが待ち構えている。

「絶対に行かせねえよ!」

GTOがセンターラインを跨いでの走行ラインでブレーキングを開始、後方を走るエボ6に対するブロックラインだ。しかし音夢はそれを意にも介さずアウト側ラインからのブレーキングを行う。2速シフトホルドのまま、ブレーキペダルをリリースしながらステアを進行方向に切り込んでいく。

「っ……い!」

GTOのコーナリングラインが少し膨らむ。コーナー中腹を過ぎたあたりでようやくイン側に車体を乗せるが、きちんとクリップにつけていたエボ6がアウト側ラインから攻め込んでくる。このまま行けば次のコーナー進入でエボ6にインを取られる——そう判断した森山は、アクセルを開けるポイントを若干早めてコーナー脱出速度を稼ぎ、エボ6の前で次コーナーへのアプローチラインを死守。

(そこまでやりますか……)

そんなGTOの動きを後ろで見ていた音夢。GTOの走行ラインをきつちりトレースし、相手にプレッシャーを与える。バトルは既に、コース半分を消化していった——。

2台はヘアピンを抜けて、いよいよアクセルを大胆に踏み込んでいける高速ストレート区間へ突入。

「ここで一気に突き放してやる！」

森山が一気にアクセルペダルを踏み込むと、G T Oの心臓である6 G 7 2型エンジンが唸りを上げ、重たい車体をぐいぐい引っ張っていく。

(っ！ いよいよ速度域が上がってきた！)

音夢も前を走るG T Oが加速していくのを見ると、アクセルペダルを踏み込む足に更なる力を込めて、エボ6を加速させていく。

2台の加速力はほぼ互角。守備範囲の狭い6速トランスミッションを搭載するG T Oが、エボ6よりも早いタイミングでシフトアップし、更なる加速を続ける。

「流石にキツイいわね……！」

音夢の表情が少し曇る。こういったストレート区間では、車のパワー差がはつきりと出る。彼女は自身の操るエボ6の戦闘力を熟知している。それ故に相手のG T Oとの加速力の差に気付く。

(こつちより向こうの方がパワーは上か……)

その事を痛感させるように、徐々に離れていくG T Oのテールランプ。だが彼女は焦らず、冷静にそのテールを見据える。シフトレバーを4速へと放り込み、G T Oを追走していく。

「勝敗の行方が見えた？」

クルージング走行に入ったエボ3の車内で、真子がケンタにそう質問した。

「まあな、大体あのG T Oのドライバーのレベルも知れたし」

ケンタは相変わらず腕を後部で組み、リラックスした状態でエボ3のリアシートに身を沈めている。既にG T Oとエボ6の姿は、エボ3の車内からは確認できない。

「このバトルのポイントは、車の違いだ」

「車の違いって……エボ6とGTOって意味？ それくらい分かってるつもりだけど」

眞子が訝しげな眼でケンタを見る。それに対し、彼は苦笑した。

「あー、言葉足らずだったな」

ポリポリと頭を掻きながら、ケンタは言葉が続ける。

「オレが言いたいのは、その車の『方向性』って意味だ。同じミツビシのスポーツカーで4WDシステムを搭載し、パワーは当時の国内出力規制の目一杯である280馬力。これだけで判断すれば、両車とも同じように見えるがその実は全く違う」

「そりゃまあ……トルクとか車重とかボディの大きさとか、色々違うのは分かるけどさ」

そんな単純な話では無いだろうと思いつつも、眞子はケンタにそう言った。

「確かにマシンのスペックを見れば、その差は一目瞭然だよな。大雑把に見てもGTOの方がエボ6よりも、排気量は大きく、車重は重く、ボディはデカイ。だが、何故そうなってると思う？」

ケンタが眞子に問いを投げかける。彼女は腕を組んで唸る。それを見たケンタは言葉が続ける。

「ミツビシGTOって車は北米市場を意識した——いわばグランツールスモな車なんだよ。北米の道路事情つてのは広大な直線道路が主体でな、その道路を余裕をもって走れるために開発されたんだ。お前、ディアマンテって車知ってるか？」

「ディアマンテ？ うーん、聞いたことないわね」

腕を組んだままそう言った眞子に、ケンタは「だろうな」と言つて苦笑する。

「ディアマンテっていえばミツビシの上級セダンだったな。確か今はもう生産されてなかった筈だ」

眞子の代わりに、エボ3をドライブする純一が視線を前から外さずにそう答える。

「正解だ、さすがミツビシのセダン乗りだな？」

「おいおい。ディアマンテとランエボじゃ、同じセダン車でも物が違

うだろーが。一緒にすんなよな」

ケンタが純一の答えを茶化しながら肯定すると、純一がツツコミを入れる。

「悪い悪い。そんで話を戻すが、GTOはそのディアマンテのエンジンとシャーシを流用して作られた車なんだよ。もちろんエンジン自体はGTO用にアレンジされてるが、基本的には同一の物を使用してあるんだ」

「まあ3リッターのツインターボエンジンで4WDって聞くと、ポテンシャルありそうんだけどな、如何せん車重が重たすぎる。まあミツビシにGTOをスポーツツーカーとして売り出す気があったかは微妙だよな」

ケンタがGTOという車の説明を終えて、純一が自身の感想を述べる。そして少し間を置いてケンタが再び口を開いた――。

バトルはGTOが先行し、徐々にエボ6との距離が離れる。しかし、森山は思ったほどエボ6を突き放せないことに少し戸惑いを感じていた。

（思っていたより離れねえ……。微妙なコーナーはあるが、ほぼニュートラルステアで曲がれる程度で、ほぼアクセル全開なのによ！）

先ほどの初音ワインディング区間よりかはコーナーの数が遥かに少なく、また曲率も緩いこの高速区間で後方のエボ6を振り切れると思っていた森山。確かに先ほどよりもエボ6との距離は離れてるが、それは彼の思っていた距離ではなかった。悪態をつきながら乱暴にシフトレバーを5速へと叩き込み、更にGTOを加速させてゆく。

（パワーは向こうの方が上だけど、こっちだつて負けてない）

徐々に離れるGTOのテール。しかし音夢は焦らない、彼女はシフトレバーをトップギアの5速へと放り込んで更なる加速をエボ6に与え続ける。

（それにこの区間の後は――）

頭にコース図を思い浮かべる音夢。地元だからこそ、この初音山の

コースは頭に叩き込まれている。この初音山で比較的速度が乗るこの区間を、2台は一気に駆け抜けてゆく。

「——来た」

音夢が呟く。この高速区間の終わりを告げる目印が見えてきたからだ。2台の前に広がるのは、右に大きく曲がる高速コーナー。前を走るGTOの車体がアウト側に寄り、ブレーキランプが光る。車体を一気にインへと寄せてコーナーリングをするGTO。

GTOがコーナーを立ち上がり、そして音夢のエボ6が高速コーナーへ進入。GTOよりも車重が軽く進入スピードの低いエボ6は、軽くアクセルを抜いて軽快にタックインを決める。コーナー中腹を超えた辺りでアクセル全開、4つのタイヤが路面を蹴飛ばし、GTOよりも速いスピードでコーナーをクリア。たった1コーナーだけで、先ほどのストレートで離れたGTOとの距離を一気に詰める。

(なっ……い！ 一気に差を詰めてきやがった!?)

突き放そうと思っていた区間で逆に差を詰められた——、この事実には森山は焦る。この高速区間を抜ければ、次は連続でヘアピンカーブが存在する低速区間だ。それはGTOが苦手とし、逆にエボ6にとつては有利なシチュエーションである。

眼下に広がった、お世辞にも長いとは言えないストレートを駆け抜け、再びGTOとエボ6の差が若干だが開く。しかしそれは微々たる物であり、エボ6はGTOを射程圏内に捉えた。虎視眈々とオーバーテイクのチャンスを伺っている。

(この距離なら、次の4連続ヘアピンでアクションを起こすことが出来るそうね)

音夢が頭の中でバトルの展開をシミュレートし、GTOに勝負を仕掛ける——。

「そんなGTOに対して、音夢の乗るランサーエボリューション6——通称「エボ6」は、ミラージュセダンという車と部品共有されたランサーをベースにして作られている。これを聞くとディアマンテを流用したGTOとそう大差ないと思うかもしれないが、GTOとエボ

6じゃあその在り方は全く違う」

腕組みはそのまま、ケンタは今度は音夢の操るエボ6の説明に入る。

「いわずもがな、ランエボって車は最高峰ラリー競技であるWRCに勝つために作られた車だ。実はランエボはWRC出場資格であるFIAのホモロゲーション取得のために生産された、いわば限定車なんだよ」

「そうなの？」

真子が少し驚いた表情をする。それを見たケンタは苦笑しながら言葉を続けていく。

「現在ランエボには1〜10までのナンバリングが与えられていて、それぞれランエボ1〜3が第1世代。ランエボ4〜6が第2世代。ランエボ7〜9が第3世代。そして現行車であるランエボ10が第4世代と呼ばれる。これはベースとなる車両が切り替わってるためだ」

「俺のエボ3は第1世代で、ランサー1800って車をベースに作られてるんだ。元々ランサー1800はFF駆動の排気量1.8Lの車なんだが、そこにギャランVR-4って車の4WDシステムとランエボ用にパワーアップさせた4G63型エンジンを移植したんだよ」

エボ3のオーナーである純一が補足の説明を入れる。

「そして音夢のエボ6は第2世代。ケンタの説明にもあったように、ミラージュセダンと部品共有化されたランサーをベースにして作られている。第2世代のランエボシリーズの特筆すべき点は、やっぱりAYCシステムだな。あと音夢の乗ってるエボ6トミ・マキネン・エディションT.M.E.は、足回りとエンジン特性を標準のエボ6と比べて少し変更している」

「つまりランエボはGTOと同じくベースとなる車から作られた車だが、WRCに勝つという目的で作られた——いわば“走り”を追求した“スポーツカー”だ。北米市場を意識して作られたグランツーリスモカーのGTOとは、考え方が全く違う。オレが言った車の方向性ってのは、つまりはそういう事なんだよ。軽量ハイパワーな2リッターターボと小柄なボディ、そして優秀な電子デバイスシステム。その全

てがWRCに勝つためだけに作られている」

後ろでしていた腕組みを解いて、ケンタはリアシートに深く身を沈める。

「GTOとランエボ。2台ともミツビシを代表するスポーツカーだが、それぞれの車が生まれた経緯は全然違う。いくらチューニングしても、その車が生まれる切欠きっかけは消えない——いや「消せない」のさ」

——車が生まれる切欠、それが消えてしまったら。その車が生まれた経緯も消えてしまうから。だから消せない——その車が持つ方向性だけは。

それに、とケンタは言葉を付け加える。

「あのGTOのドライバーが車のパワーを活かせる区間で勝負をつけられると思っているのなら、それこそ間違いだ。峠道やまみちの走り方ってのはそんな単純な物じゃない」

微笑を浮かべ、ケンタは流れていく風景を横目で見た——。

高速区間が終了し、いよいよ連続低速ヘアピンが2台の前に現れる。まずは左へと曲がるヘアピン。エボ6がGTOの後ろから飛び出し、コーナーのイン側ラインへ移動した。

「行かせるか!」

バックミラーでエボ6の動きを確認した森山は、ステアを切ってGTOの車体をエボ6の前へと進路変更、そしてブレーキングを開始する。

(やはりブロックラインを取ってきましたね)

エボ6もブレーキングを開始、トップギアの5速からテンポよく2速へとシフトダウン。2台ともブレーキの制動音を響かせながらコーナーへ進入していく。

「ッ……」

一瞬、森山の表情が曇る。エボ6はブレーキングを終えているが、GTOのテールランプはまだ光っていた。ブレーキのリリースポイ

ントが奥になったことにより、GTOはアクセルを踏み込んでいくタイミングが遅れる。その結果エボ6とGTOの距離は縮まり、テールトウノーズ状態へと2台はもつれ込む。

(……いくら追いつかれても、立ち上がり加速はパワーのあるこっちが有利だ。コーナー進入の時だけ相手の動きに気を付ければ、前に出られることはねえ！)

コーナーリングを終えて、コーナー出口でアクセル全開。2台とも同じ2速ギアでのコーナー脱出だが、GTOがエボ6を立ち上がり加速で引き離す。

(コーナーを曲がる速度はこっちが上だけど、2速ギアでの立ち上がり加速で離されちゃう)

そんな事を思いながら、間髪入れずに現れる次の右ヘアピンを見据え、再びコーナーのイン側ラインへと車体を寄せる。

(またインからか！)

エボ6の動きを警戒しながら、森山は次のヘアピンへとGTOを進入させる。もちろんエボ6の走行ラインを潰すため、インベタでのコーナー進入だ。それに対し、エボ6はラインを少し変えてきた。GTOがブレーキを開始したと同時に、車体がセンターラインを跨ぐ形になるよう進路を変更、もちろん前方にGTOが居たため減速しながらだが。

(ラインを変えてきやがった!? だがその位置からじゃ抜けねえよ！)

インベタのラインのままGTOがコーナーリングを開始し、コーナー中腹でアクセル全開。もちろんアンダーステアが発生し、GTOの走行ラインがアウトへと膨らむ。だがこれが森山の狙いだった。次の左ヘアピンでイン側のラインを奪うために、コーナー立ち上がり時にアウト側ラインへと車体を寄せるのが目的だった。

「よくやりますねえ……」

これには音夢も驚く、というか半分呆れ顔だ。そんな動きをすれば、車に掛かる負担が大きくなるというのに。

(まあそれだけ追い詰められてるっていう裏返しでもありませんけど。

そろそろ勝負時ですね)

インにつくのを遅らせたエボ6の前には、コーナー脱出ラインを描けるぽっかりと空いたスペース。音夢はクリップポイントをコーナー出口手前でとり、空いたスペースにエボ6を放り込み、コーナー脱出時にアクセル全開。立ち上がり加速で、エボ6のノーズがGTOのリアタイヤハウス付近まで並びかける。

そして左ヘアピン。GTOがイン、エボ6がアウトからの走行ラインでコーナー進入。車重が軽いエボ6はブレーキング勝負でコーナー進入時、GTOの真横へと並びかける。

(並んでコーナーへ突っ込む気か!?)

森山は隣を走るエボ6に驚愕しながらコーナリングを開始。アウトライン側のエボ6も、ワンテンポ遅れてコーナリングを開始する。(くっ……:外のエボ6のボディが邪魔で、センターラインを跨げねえ!)

走行ラインの制約でインベタの苦しいライン取りを余儀なくされる森山。ただでさえ旋回が苦手なGTOだ、そのうえ苦しいコーナリングラインも相成りその旋回速度は、アウト側とはいえ走行ラインの自由度がGTOよりも高いエボ6より圧倒的に低い。

結果として、コーナー脱出で僅かだがエボ6がGTOの前へと出る。そして次に待ち構えるのは連続ヘアピン最後の右ヘアピンコーナー、つまり両車の走行ラインが先程までとは逆転し、エボ6はイン側でGTOはアウト側ラインからのコーナー進入となる。

(クソが!・これを狙ってやがったのか!)

悪態をつきながら、森山はコーナーを見据える。重たいGTOでエボ6相手にブレーキング勝負を仕掛けたところで、精々横に並びかけるのが関の山、追い抜きには至らないだろう。

(だがコーナー立ち上がりの加速勝負で、こっちのパワーなら前に出られるはずだ!)

このヘアピンを抜ければ、コース最長のロングストレートを誇る高速区間だ。その区間までにエボ6の横に並べれば、パワー差を活かしてストレートで突き放せる――。

そう判断した森山はブレーキングを開始、それと同時に横を走るエボ6もブレーキングを開始する。エボ6がGTOの前に出たまま、コーナーリング体制へと入る2台。

(流石にランエボ相手にブレーキング勝負は無理か……！)

コーナーリングスピードもGTOが少し不利なようで、若干だがエボ6が前へと出る。

(けど舐めんなよ、立ち上がり加速はこっちの方が有利なんだ。2速ギアのフル加速で簡単に横に並べるんだよ！)

そしてコーナー出口が見えて、2台ともアクセル全開でコーナーを脱出しようとした——その瞬間。

「なっ!?!」

GTOのリアタイヤがいきなりグリップアウト、そのまま制御不能に陥りGTOがテールスライドを起こす。森山は咄嗟にカウンターステアを当てるが、時すでに遅し。

「ぐっ!」

コーナーのアウト側ガードレールに左リアが接触し、その反動でGTOは反対側へと吹っ飛んで完全にスピンモードへ突入する。

「——ッ!」

それを横目で確認した音夢は、サイドブレーキレバーを引き起こし、意図的にリアタイヤをロックさせた後に左にステアを切る。するとエボ6のリアが右側へと流れ始め、吹っ飛んできたGTOの右リア部分との接触を避けることに成功。サイドブレーキはそのまま効かせた状態でリアタイヤはロックし、フロントタイヤのみが駆動して動力を路面に伝える。微妙なカウンターステアを当てながらアクセルワークを行い、車体を真っ直ぐに戻すと直ぐにサイドブレーキレバーを下ろしてリアタイヤのロックを解除。アクセルを全開をして全タイヤに駆動力を与え、そのまま何事もなかったかのように走り去って行く。

「……負けたな」

スピピンが収まり道路を完全にふさぐ形で停車したGTOの車内で、呆然と森山が呟く。幸いスピピン後は何処にもぶつかっていないよう

で、ガードレールに接触した左リア部以外は無傷だった。とはいえ、もうGTOと森山に残りのコースを走る気力は無かった――。

――森山GTO、スピンにて戦意喪失。勝者、朝倉 音夢&ラン
サーEvO.6。

Act. 5 邂逅

「遅い！」

深夜。初音山の山頂駐車場に、眞子の怒声が響き渡る。

「オレに言われてもなあ」

眞子の視線の先に居るケンタが、頬をポリポリと掻きながら言った。

「今回、この車の担当は純一だぞ。文句ならあいつに言えよ」

ケンタは自分の後ろにある青い車——スバルGC8型インプレッサ22Bを指さしながら、その近くで音夢と談笑している純一を見る。

「朝倉からは、もう出来上がってるけどケンタから納車するなって指示を受けた、って言われたわよ！」

「……何の事やら」

視線を眞子から逸らしながら、白々しく答えるケンタ。先日の黒いGTOの件が終わるまで、彼の計らいで眞子の車が納車待ちとなっていたのは事実である。

もちろんそれは、ケンタが眞子の性格をよく知っているからだ。あの時、眞子が車に乗っていれば、間違いなく黒いGTOとバトルしていたであろう。ただしそうになると、仲間内の心配事も増える。

だからこそ、彼は納車を延期して眞子にバトルをさせないようにした。結果としては、音夢がGTOとバトルしてしまったが。

もちろん眞子はそんな事は露知らず、こうしてケンタに文句を言っている。当然と言えば当然だが、眞子の車が入庫した理由を知っているケンタは釈然としない。ここで彼が反撃に出た。

「つーか、そもそもその発端は、お前が縁石にタイヤぶつけたからだろうが。しかも結構なスピードだよ」

「うっ……そ、それは」

痛いところを突かれ、眞子は少し怯む。お返しとばかりに、ケンタが攻める。

「おまけにそのまま自走しやがって。そこで車止めてオレらを呼んで

りやアライメントの調整で済んだものを、フロントサスペンション一式を交換コースだぞ」

淡々とした口調で語るケンタと小さくなる眞子。気が付けば、眞子とケンタの立場は逆転していた。

「それにな——」

「まあまあ、その辺で許してやれよ」

純一がケンタの肩に手を置いて、眞子の方へ目配せする。眞子はうつ伏せで倒れこんでおり、背中には矢が何本も刺さっているように見える。もちろん実際に矢は無いが。

「仕方ねえな」

溜息を吐き、ケンタは言葉を仕舞い込む。

「まあ弄つてるとはいえ、22Bなんて希少な車なんだから、もうちよつと大切にしていればよ」

純一がそう言つて、何時の間にもやら復活していた眞子に車のキーを渡す。彼女はキーを受け取り颯爽と22Bに乗り込み、そしてエンジンをかけた。ボクサーエンジン独特のサウンドが辺りに響き渡る。

「朝倉！ 走るのに付き合いなさいよ！」

「かつたるいなあ……」

すっかり元気を取り戻した眞子は、純一に競争相手になるよう指示した。しかし彼は心底面倒くさそうな顔をし、嫌々オーラを全開にする。

「ちよつと待てよ。純一が走ったら、オレの帰るアシが無くなるだろうが」

「それはそれで、かつたるいな」

ケンタにすかさずツツコミを入れる純一。

「つたく……その面倒臭がりな性格は何とかならないもんかね」

「本当よねー」

「お前らほんと無茶苦茶だな」

ケンタと眞子に対し、純一はげんなりした表情を見せる。

「まあ冗談はさておき、走るんなら流すペースで行けよ。組み付けたばっかで、まだ暫定的な仕上がりだからな」

「分かっているわよ。しばらくしたら、またショップに車持ってくるよ」
それじゃあね、と言って眞子は車を発進させる。駐車場から出ていく22Bを見送りながら、純一はケンタに言葉を掛けた。

「いきなり全開走行に10万円だ」

「だよな」

2人がそんな事を言っていると、22Bのエキゾーストノートの音が一際大きくなって耳に飛び込んでくる。ケンタは溜息を漏らしながら、頭をポリポリと搔く。

「やっぱ追いかけてくるわ」

純一がそう言つて、愛車のエボ3に乗り込む。エンジンは掛けっぱなしだったため、すぐに眞子の22Bの後を追って駐車場から飛び出していった。

「純一って腰が重いわりに、何だかんだ言つて面倒見は良いよな」

「それが兄さんの良い所ですから」

残されたケンタと音夢が、純一の行動について話す。

「でも引き止めないんですね、兄さんの事。帰るアシつて言つてたのに？」

「まあオレとしても、また眞子が車壊すのは防ぎたいからな。眞子が心配つてという意味じゃ無く、また修理すんのが面倒つて意味だけど」

「ふふつ、そうですか」

音夢は2台が走り去つていった方向を、微笑しながら見た。

連続する低速ヘアピンコーナーを駆け抜ける22Bと、その後ろに少し離れた距離を保つエボ3。

「思った通り、いきなり全開じゃねーか」

前を走る22Bの速度を見て、純一は呆れた。これはバトルではなく、高速度とはいえあくまでもクルージングだ。

(気持ちには分からないでもないけどな……)

修理に出していた愛車が自分の元へ戻ってきたら、いち早く走りたいたいというのが人情だろう。特に走り屋と呼ばれる人種はその傾向にある。もちろん眞子もその例に漏れない。

「ん？」

緩やかな右コーナーを抜けた瞬間、前を走っている真子の22Bがハザードを出してスロウダウン。純一も22Bに続いてエボ3をスロウダウンさせる。

「おっと……」

2台の先に見える左コーナーから、2台の車が飛び出してきた。真子がスロウダウンした理由がわかり、純一は飛び出してきた2台を目で追う。

「美春のインテグラと……もう1台は何だ？」

前を走るのは黄色のDC2型インテグラ タイプR。このインテグラは彼の知り合いであるため容易に判別できたが、その後ろを走る車は暗がりと言う事もあり彼には車種を特定できなかった。

「なっ!？」

純一は前を走る22Bの方へ視線を戻すと、素っ頓狂な声を上げた。なんと22Bがいきなりサイドスピンターンで反転し、さっきすれ違った2台を追いかけていく。

「おいおい、マジかよー!」

純一もサイドブレーキレバーを引き起こし、リアタイヤをロックさせてスピンターン。すぐさま22Bの後を追っていった。

22Bとエボ3とすれ違った、何故かほんのりとバナナの香りが立ち込めるインテグラの車内。

「あれは……水越先輩と朝倉先輩の車ですね」

このインテグラのオーナー、天枷^{あまかせ}美春^{みはる}が、先ほどすれ違った2台の車を見てそう呟く。

「つとと……今は前に集中しないと……」

後ろに居る車をバックミラー越しで見ながらシフトチェンジ。暗くて車種は特定できないが、かなり速い車だということは直感で理解していた。現に全開とまではいかないが結構なハイペースで走っている。しかし後ろの車が離れていく気配はない。

「新しいコンピュータセッティングを試すつもりだったんですけど

……」

ナビシートに置かれたノートパソコンの画面に表示されたグラフを見る。暫定的なセッティングは完了したつもりだったか、まだまだ詰めれる余地はある。

2台はストレートを抜けて低速ヘアピンが続く区間へ突入。まずは右ヘアピン、アクセルペダルをハーフスロットルの状態で維持しながら、左足でブレーキペダルを踏み込む。

美春はメーターインパネ付近に追加設置された、ブーストメーターの針の位置を確認しつつステアを切り込んでいく。ボルトオンターボ化されたB18C型エンジンのブースト圧を落とさないよう、アクセルを戻す時間は最低限にとどめる。

「……………」

インテグラの後ろを走る車——白色のスバルGC8型インプレッサ。そのインプレッサのドライバーは、前を走るインテグラのテールランプを見据える。シフトを1つ落とし、高回転を維持しながらインテグラを追走。

前を走るインテグラが左ヘアピンを曲がる。コーナリング中にブレーキランプが点灯するのを見て、左足ブレーキを使用しているのがわかった。

「……………」

インテグラに続いて左ヘアピンを抜けると、後ろから迫ってくる2台分のヘッドライト——真子の22Bと純一のエボ3の2台の存在をバックミラー越しで確認した。

「あれま。ちよつとばかし不利かな?」

後ろから迫る2台の雰囲気を感じ取り、インプレッサのドライバーは薄ら笑いを浮かべて軽口を叩く。前を走るインテグラが右へ曲がり、そのテールランプの軌跡が流れるようにコーナー奥に吸い込まれていく。

「あのインテグラ、相当えぐい改造してんなあ。FF駆動ってあれだけ上り勾配でダッシュ出来るもんなんか?」

インプレッサも右コーナーを曲がり、少し長めのストレート区間が

現れる。3速ギアへとシフトアップ——インプレッサに搭載されるボクサーエンジン独特のサウンドを辺りに響かせながら、インテグラの後ろへとくっつく。

「インプレッサでしたか……流石にコーナー立ち上がりの加速ダツシユじや4WDに敵いません……!」

美春は一気に後ろへと食いつくインプレッサを見て顔をしかめる。頭の中に、彼女の先輩であり仲の良い音夢のエボ6の姿がフラッシュバックする。

しかし、インテグラの心臓であるB18C型VTECエンジンは元々は高回転型ユニット。レブリミットの8000rpmまで一気に吹け上がり、更にタービン武装された恩恵も合わさって、ストレートの加速勝負でもインプレッサにも引けを取らない。

「おいおい……旧型とはいえインプレッサの加速とタメ張れるって言うのかよ?」

流石に少し焦るインプレッサのドライバー。バックミラーを覗くと、先程から追ってくる2台のヘッドライトの光が大きくなっていく。あの2台が前を走るインテグラの仲間だと考えれば3対1であり、とても不利な状況だ。

「……残念。ここまでだな」

ふう、と一息ついてハザードボタンに手を伸ばす。アクセルペダルからゆっくり足を離してからハザード点灯、エンジンブレーキでゆっくり減速しながら車体を左へと寄せた。その横を、真子の22Bと純一のエボ3が追い抜いていく。

「……なんかえらく豪華な車が走って行った気がする」

インプレッサのドライバーが、横を掛けて行った22Bを見て眩く。別の意味で、どこか負けた気がしたインプレッサのドライバーだった。

Act. 6 同型車① ―インプレッサ―

「お？」

山頂の駐車場で音夢と語り合っていたケンタが、駐車場の入り口から入ってきた車に気が付く。台数は3台であり、そのどれもが彼には見覚えがある。

「あの黄色バナナ色のインテグラは美春か。それに真子の22Bと純一のエボ3まで……どうなってるんだ？」

美春のインテグラはまだしも、さっき下って行ったばかりの真子と純一が、美春の車と一緒に駐車場に入ってきたのには違和感を覚えた。あの2台が初音山を往復したにしては時間が早すぎる。

違和感はケンタだけではなく音夢も感じたようで、きよんとした顔でこちらへ近づいてくる3台の車を見る。

「こんばんわですつ、音夢先輩、ケンタ先輩っ」

2人の近くに駐車したインテグラから、美春が元気一杯な声と共に降りてくる。そして、そのまま音夢に抱きついた。

「よう、相変わらずバナナの匂いが充満した車だな」

苦笑しながらケンタがそう言う。インテグラのドアが開いた瞬間、あたりにバナナの香りが流れ出したからだ。芳香剤だと思うが何処で売っているのだろうか。少なくとも初音オートでは取り扱っていない。

「バナナミンは体に良いですよっ」

「わかった、わかった」

ケンタがバナナの凄さを力説してくる美春を宥めていると、真子の22Bと純一のエボ3も近くに停車し、車内からドライバーそれぞれが降り立つ。

「やっぱり水越先輩と朝倉先輩だったんですねー」

「こんばんわ、天枷さん」

「真子がいきなりスピランかましたからな」

美春に挨拶する2人。とつても、純一は真子に対する苦言であるが。

「まあ大方予想通りつてとこだな」

嘆息しながら眞子を見るケンタ。眞子はケンタの視線に気づいたのか、バツの悪そうな顔をする。

「まー別に良いけどよ。それよりなんで美春のインテグラにくっ付いて、お前ら2人が居るんだよ?」

「言っただろ、いきなり眞子の奴がスピーターンしたつて」

「それだけで状況を把握できると思ってるのか」

ケンタがジト目で見ると、純一はかったるいと言いながらも、先程の説明を行う。

「あー。そういうことな」

所々で美春の解説も織り交ぜながらの説明を聞いたケンタは、あっさりとな納得した。

「しかし、そのインプレッサも結構やるな。暫定的なコピュータセツティングだったとは言え、美春のインターターボを突っつきまわせるなんてよ」

美春のインテグラに搭載されるコンピュータセツティングを行つた——Engine^E Erring^R. Amakase^天のレベルの高さを知っているケンタは舌を巻く。彼の愛車もERR天枷が手掛けた——正確にはそれをベースにしてケンタがアレンジを施した——物だから。

「是非ともお目にかかりたいもんだね——ん?」

「あの車……」

駐車場へ入ってくる1台の車に、ケンタと美春が気付いた。白いボディカラーと大きなリアウイングが特徴的な車が、ゆっくりとこちらへと向かってくる。

「あのインプレッサよ」

眞子が近づいてくる車——白色のGC8型インプレッサを見て、ケンタに耳打ちする。やがてそのインプレッサは彼らの対面の駐車スペースに停車し、車内からドライバーの男性が降りてきた。

「さつきはどうも。そのインテグラ相当えぐい改造——つて、よく見りやインタークーラー設置してんじゃねーか。おいおい、ターボ仕様

かよ。そりや速い訳だ」

インプレッサのドライバーが、挨拶をそこそこにインテグラの前に居る美春にそう言った。その声色に敵意は無く、随分と穏やかなものだ。

「パワーってどんだけ出てんの？」

「え？ えーと、300馬力弱位だと思いますけど……」

急に話を振られた美春は、戸惑いながらも自分のマシンスペックを公表する。

「おいおいマジかよ……。よく峠道でFFシャーシの300馬力を踏めるな。車もそうだが、ドライバーのレベルも高いな」

「あ、ありがとうございます……？」

語尾が上がる美春。さつきまでバトルしていたとは思えないほど、ドライバーの表情は穏やかで友好的だ。ケンタを除く4人が少し呆気にとられていると、ケンタがインプレッサのドライバーに声をかける。

「そつちのインプレッサも、随分と綺麗な車じゃないか」

目の前に止まるインプレッサを見て、ケンタは感心した。ホイールはおろか車高すらもノーマル。エンジンサウンドから察して、恐らくマフラーやエンジン関係も何一つパーツを変えていないのだろう。

「そつちは車屋さんか？」

「ああ」

ドライバー男性の含みのある質問の意味を理解し、それを肯定するケンタ。

「そのテの車は、少なくともマフラー辺りは変えられてるからな」

「確かに。特にこうゆう所を走ってる奴なら尚更っつか？」

忍び笑いをしながらケンタを見る男性。2人は何処か波長が合ったのだろうか、お互いに不敵な笑みを浮かべる。

「地元さんに向けて言うのは失礼だが、こんな辺鄙な場所にも腕の良い車屋が有るんだな」

「そりやどうも」

「是非とも手合わせを願いたいもんだ」

男性はケンタ達の後ろに並んだ車を見て、バトルの挑戦状とも取れる言葉を投げる。

「残念だが、ここにオレの車はねえよ」

「なんと。そりゃ残念だ」

「それなら、私が相手をしてあげるわ。車はそのインプレッサ22Bよ」

大きさに肩をすくめる男性に、真子が声をかける。真子が示した車種を聞き、男性は顔色を少し変えた。

「良いねえ。22Bなんてレアな車と走れる機会なんてそうそう無いからな」

男性は真子の方を向いて口元をニヤつかせる。自信があるのか、それとも単純に嬉しいのか。どちらにせよ、これでお互いにバトル承諾となる。

「バトル方式は？」

「横並びスタートのダウンヒル1本勝負でどうかしら。ゴールは麓の駐車場よ」

「了解。——つと、自己紹介がまだだったな。俺は宮沢みやざわ 和樹かずきだ、よろしく」

男性——宮沢がそう言うと、真子を始めとするその場に居る全員も、宮沢に自己紹介を行う。

「そんじゃあ、早速始めるとすつか」

「そうね。誰かカウントお願い」

宮沢と真子が各々のインプレッサに乗り込み、車を駐車場から移動させてスタートラインに着けた。

Act. 7 同型車② — 戦闘開始 —

宮沢と眞子。白と青のインプレッサがセンターラインを挟んで横並びになり、スタートラインに着く。独特のボクサーサウンドを静かに響かせながら、2台は出走の時を待つ。

「それじゃあ、カウント行きますよー!」

スターター役を引き受けた美春がセンターライン上に立ち、右手を空に向かって突き上げる。

「5、4、3、2、1——」

カウントと共に美春の指が折り曲げられる。

「GO——ッ!」

そして美春の腕が大きく振り下ろされると、2台は一気に加速していく。

——バトルスタートだ。

・バトル車両・

SUBARU GC8 IMPREZA WRX—STi (宮沢

和樹)—V.S—SUBARU GC8改 IMPREZA 22

B—STi (水越 眞子)

バトルコース「初音山・下り・夜・晴れ」

バトルBGM「Over The Rainbow (頭文字D A

RCADE STAGE Ver. 3 参照)」

「やっぱ水越の22Bが前だ!」

スタートライン付近に居たギャラリーが叫んだ。ほぼ同時にロケットスタートしたと思われた2台だったが、その差は直ぐに出てしまふ。

「まあ当然っちゃ当然だな」

2台のスタートを見ていた純一が呟く。先程の宮沢とケンタの話聞く限り、彼のインプレッサはノーマル状態と判断するのが妥当だ。

「水越先輩の車って、結構パワー出てますもんね〜」

「それに排気量も、真子の22Bの方が上だしね」

美春と音夢も、真子の22Bが先行でスタートするのは当たり前という考えのようだ。

(……いや、少し違う)

しかしただ1人。ケンタは彼女たちと違った思考をしていた。

(確かにチューニングの差はあるだろうが、スタートダッシュを見る限り、宮沢のインプレッサにはまだ余力があった)

先ほどスタートダッシュを決めた2台の姿が、ケンタの頭の中にフラッシュバックする。

「余裕の後追いつて事か」

コーナーの奥へと吸い込まれていく2台のテールランプを見送りながら、彼は小さく呟いた。

スタートで先攻した真子は、リズムよく3速までシフトアップして車速を乗せる。ノーマル状態より100馬力も上乘せされたEJ22型エンジンは、グイグイと車体を引っ張っていく。

「同じGC8型インプレッサだけど、こっちの方が速いわよ!」

第1コーナー。アクセルオフで軽快にタックインを決めていく22B。右への切り返しもクリップをしつかりと取り、続いて左の複合ヘアピンへ進入。ステアを一気に左へと切り込み、慣性力を使ってリアを振ってテールスライド状態へ。アクセル全開のまま、カウンターステアを当ててコーナーをクリアしていく。

「おいおい……マジかよ!」

22Bの動きを後ろで見ていた宮沢は驚く。フェイントモーションからの超高速度の慣性ドリフト——中々真似のできない高等技術だ。

「さながらWRCだな……」

ワイドボディの22Bのその風貌も合わさり、まるでWRCラリーカーの走りを見ているかの感覚に陥る。

(まあ……その位してもらわないと、こっちも楽しめないけどなっ)

内心で軽口を叩きながら、宮沢のインプレッサも左へアピンへ進入。一気にブレーキを踏み込みステアを左へ。リアタイヤのグリップが一瞬で失われてテールスライドを起こし始める。そしてアクセルを全開にしてドリフト走行へ。カウントアーを当てずステアリングを真っ直ぐに戻し、ゼロカウントードリフトでコーナーを掛け抜けていく。真子の22Bほど派手さは無いものの、とてもスムーズなコーナリングだ。

立ち上がりは4WDの恩恵を活かしてロケットダッシュ。一気に真子の22Bへと肉薄する。

「なんだあのインプレッサ!？」

「水越の22Bを相手に一步も引いてねえ!」

ヘアピンで2台を見ていたギャラリィが騒ぐ。それほどまでに、宮沢の走りは圧巻だった。

「さてと。ギャラリィを沸かしたところで、追走開始と行きますか!」

宮沢はシフトを3速へ放り込み、前を走る22Bをしつかりと見据える。既に真子の22Bは次の右コーナーをコーナリングしている最中だ。単純にパワー差が出ているのか、それとも宮沢が余力を残しているのか。真相は定かではないが、2台の距離は少し遠い。

インプレッサが右コーナーへ差し掛かる。アクセルオフと同時にステアを切り込み、一気にイン側のクリップへ車体を寄せる。クリップポイントを通過して車体が安定したと同時にアクセル全開。4つのタイヤが地面を蹴飛ばしコーナーを立ち上がっていく。まだ22Bのテールランプは遠い場所で灯っている。

(あの22B、相当パワー出てんなあ。いくら22Bがクロスミツシヨン積んでるモデルとはいえ、2速から3速ギアのシフトアップで離されるかよ)

前を走る22Bを冷静に分析する宮沢。短い直線を駆け抜け、ヘアピンコーナーが連続して続く区間へと2台は突入して行く。

真子の22Bは相変わらずリアタイヤを少し滑らせながら、素早いコーナー進入を続ける。殆どアクセルを緩めることは無く、攻撃的なドライブだ。

「しかもDCCDをフリー設定で走ってるのか？ えらくリアが巻き込んでるじゃねえかよ」

22Bの動きを見ていた俊介がそう呟く。彼はギアを2速ホールドのまま、ステアリング操作だけでこの連続ヘアピンコーナーを抜けていく。

きつちりとクリップを取り、徐々にコーナリングスピードを上げていけば22Bへと追いつける。パワーで劣っていても、走行ラインのシビアさでインプレッサは驚異的な追い上げを見せていた。

「さて、そろそろ面白くなってきた頃合いかな？」

スタート地点に居たケンタが、ふと呟く。

「どういうことですか？」

ケンタの言葉に、美春が反応した。

「インプレッサで車の戦闘力を考えれば、今頃2台は連続ヘアピン区間あたりに居るだろうな。まあパワー差を考えて、真子の22Bが先行してるって形か」

「あの……さっぱり分からないんですけど……」

美春の頭の上で？マークが浮かぶ。

「なあお前ら。ジムカーナって自動車競技を知ってるか？」

いきなりのケンタの問いに、3人は不思議な顔をした。

ジムカーナとは、広大な敷地内にパイロンなどを置いてコースを作り、1台の車でタイムアタックをする競技だ。

「勿論知ってるけど、それがどうかしたか？」

純一が他2人の気持ちを代表した質問をぶつける。

「いま真子の相手をしてる宮沢 和樹だが——彼はプロのジムカーナ選手だ。しかも昨シーズンのシリーズチャンピオンのオマケ付き」

ケンタは苦笑しながら自身のスマートフォンを弄り、画面を3人に見せた。

「はつきり言っちゃえば凄腕のプロレーサーってことだ。オレも何処かで見たことある顔だとは思ってたんだけどな」

ケンタはスマホの画面を消し、コースへと顔を向ける。

「このバトル、そう簡単には決着はつかなさそうだな——」

2台は連続ヘアピンコーナーの区間を走行している。前を走るのは真子の22Bで、そのすぐ後ろを宮沢のインプレッサが追走していた。

「一気に差を詰めてきたわね……!」

バックミラーに映るインプレッサの姿を見て、真子は車内でそんな発言をする。

(マシンスペックはこつちが勝つてるはずよね)

3速へのシフトアップ。真子の22Bはクロスミツションを積んでいるため、宮沢のインプレッサよりも早いシフトチェンジタイムングだが、パワーアップの恩恵でトルクの落ち込みなど無くスムーズに速度は乗っていく。

しかし後方を走る宮沢のインプレッサは離れない。

(……まあ良いわ、この連続ヘアピン後は初音ワインディング——)

22Bのフロントスクリーンに、連続ヘアピンの最後を知らせる左コーナーが現れる。ブレーキペダルを踏み込みヒール&トウでギアを1つ下げ、やはりテールを振り出してコーナーへ進入していく。

カウンターステアは無しのでゼロカウンタードリフト。しかもアクセルは全開であり、スキル音を響かせながらコーナーを抜けていく。

「この区間で突き放すわ!」

真子の22Bに少し遅れて宮沢のインプレッサも左コーナーを抜け、2台はいよいよ初音ワインディングへと突入して行く。

「でも、いくらプロレーサーだからって水越先輩の22Bに追いつくのは難しいんじゃない……」

ケンタからの情報で真子の相手がプロレーサーだと知った美春が、ケンタに再び質問をぶつける。

「まあ確かに真子の22Bはウチ特製の初音山SP^{スペンヤル}Lセッティングだから、マシンスペック的には相手のインプレッサが敵う要素は無い

な」

だが、とケンタは言葉を続ける。

「やっぱドライバーの技術の差つてのはデカいんだよ。もちろん眞子の腕は確かだ、現にあの22Bを峠道で振り回して走れる位だからな」

眞子の22Bをチューニングしたのは彼であり、そのポテンシャルと眞子のドライブテクニクは重々把握している。

「それでもその車の持つポテンシャルを限界まで引き出せてはいない。理由は至極簡単で、それは眞子だけじゃなくオレ達にも通ずる物がある」

「どういうことですか？」

何を言っているのか、という表情を浮かべる美春からの質問にケンタは苦笑しながら答える。

「つまりオレ達がやっていることは、ただの『お遊び』だって事だよ。峠道で車を走らせるのはあくまでも趣味であり仕事じゃあない」

「え？ でも朝倉先輩やケンタ先輩ってプロの車屋さんですよね？」

美春からのツツコミが来る。

「確かにオレや純一はプロの車屋だが乗り手レーサーじゃなく造り手メカニックだ。車を速く走らせる、という仕事は畑違いなわけだ」

「でも眞子の相手の方は違う、と」

音夢が納得したかのような声色で呟く。

「そうだ。レーサーは車を速く走らせるのが仕事であり存在意義だ。オレ達とは根本的に『走る』こと』に対しての考え方が違う」

駐車スペースの車止めに腰を下ろし、ケンタは更に言葉を続けていく。

「しかもジムカーナ選手と峠道の相性は抜群だ。峠道つてのは、ジムカーナコースに勾配をくっ付けたようなもんだからなー」

ケンタは軽口を叩いて、薄笑いを浮かべた。

「つとと……忙しい区間だな」

初音ワインディングに突入した2台。後方を走るインプレッサの

車内で宮沢が呟く。忙しなくステア操作を行い、インプレッサを曲げていく。

(コーナ―区間はDCCD装着車の22Bの方が速えよなあ)

少し離れた22Bのテールランプを見ながら、シフトは3速ホールドのまま左右旋回を繰り返す。

(しかもクロスミッションのギア比がコーナ―に対してキッチリ合ってるし……こっちは立ち上がりでブースト戻らねえよ)

ステアリングコラム部の左上に設置された、小径のブーストメーターに目をやる。ハーフスロットルでコーナ―へ進入し立ち上がりでは勿論アクセル全開だが、やはりコーナリング中のブースト圧の落ち込みが大きい。

なるべくブースト圧が落ちないように、微妙なテールスライドを維持しての走行をする宮沢のインプレッサ。前を走る22Bは軽快にタックインを行ってクリップポイントを抜けていく。

「まあそれを言い訳にする気は無いけどな」

前を走る22Bのテールランプが光る。それは初音ワインディングの終わりを告げる、低速ヘアピンへの進入アプローチだった。22Bは大きくテールを振り出して4輪ドリフト状態でコーナ―を駆けていく。

「さてと……そろそろ反撃開始と行くか」

宮沢の目前にも低速ヘアピンが現れる。コーナ―への進入スピードと走行ラインは眞子の22Bとほぼ同じ。だがブレーキング開始の位置は、22Bと比べて大幅に遅れていた。

「お、おいおい……！ あのインプレッサ、ブレーキ遅らせすぎじゃねえか!？」

「やべえ！ 逃げろッ、車が突っ込んでくるぞ！」

低速ヘアピンでギヤラリーしていた数人が慌ててガードレールから離れて避難を開始したが、それを嘲笑うかのようにインプレッサからハードなブレーキング音が聞こえてきた。超レイトブレーキングでインプレッサのブレーキローターは熱で真っ赤になり、4つのタイヤは一気にグリップを失い車体は吹っ飛ばされる。

普通ならばパニックになってしまうような挙動だが、宮沢はそこからアクセル全開。鮮やかなゼロカウンタードリフトで車体を制御し、フロントバンパーがイン側の縁石ギリギリを舐めるかのように通過していく。

「すげえ！　なんであんな速度で曲がれんだ!？」

「コーナリングスピードが水越の22Bよりも速えぞ！」

アウト側ガードレールのギリギリをかすめながらコーナーを立ち上がり、次のヘアピンへもドリフト状態で突っ込んでいくインプレッサに、ギャラリータちは騒然となった。

(……じわじわ追い上げてきたわね)

先行する22B。眞子はその車内で、徐々に近づいてくるヘッドライトの光をバックミラー越しに確認する。

(あの低速ヘアピンだけで、一気に追いついてくるなんてね。随分と巧いやつじゃないの)

ヘアピンコーナーを抜けて、22Bはアクセルを踏み込める高速区間へ突入。眞子はアクセルペダルを床まで踏み込み、それに呼応して22Bが独特のボクサーサウンドを奏でながら猛加速していく。

「でも、このパワーセクションでまた突き離すわよ！」

レッドゾーン付近までエンジンを回し、そして4速へとシフトアップ。マフラーから青白いアフターファイヤを吐き出し、初音山に22Bのエンジンサウンドが響き渡る。

「おいおい……流石に速すぎねえか？」

加速していく22Bを後ろから見た宮沢が、思わずそう呟く。

(シフトタイミングとスピードを見る限り、軽く100馬力は乗せてるだろうな……この峠だとちよつとハイパワーな気もするが、この直線区間だと脅威だぜ。何もせずに離されちまう)

宮沢のインプレッサも4速へとシフトアップ。若干の曲がりはあるがぼストレートと言って差し支えないこの区間で、再び22Bとインプレッサの距離は離れる。

ブーストメーターに目をやると、その針は正常値の1.1キロを指していた。視線を前へと戻すと、22Bのブレーキランプが赤く灯り

そのまま右奥へと吸い込まれていく。

(あの動きから察するに右曲がりの高速コーナーか……そのあとは確か、4連続ヘアピンコーナーだったな)

頭の中でコース図を描きながら左側へと車体を振る。宮沢の目前にコーナーが迫ってくると、アクセルを少し緩めて左足でブレーキペダルを踏みながらステアを曲げる。

インプレッサは綺麗にコーナリングラインに乗り、クリップポイントを通過。宮沢はブレーキを抜いて、再びアクセル全開。4つのタイヤが地面を蹴飛ばし、猛然とコーナーを立ち上がっていく。

22Bとインプレッサの距離はまた少し詰まり、バトルは白熱してゆく――。

「少し差は詰まったか……?」

直線主体の高速区間の終わりを告げる右コーナーを駆け抜け、前を走る22Bのテールランプを見据えて宮沢が呟く。続いて現れるのは、低速ヘアピンコーナーが続く4連続ヘアピンコーナー区間だ。

前を走る眞子の22Bのブレーキランプが赤く灯り、一気にコーナーの奥へと吸い込まれていく。

「さあ行くぜ、インプレッサ!」

22Bのテールランプの軌跡を見届けた宮沢は、己を鼓舞するかのように車内で叫んで目前に広がってくる右ヘアピンを見据えながら、インプレッサの車体をアウト側のラインへと振る。

そしてヒール&トウで回転数を合わせながら4速から2速まで一気にシフトダウン。エンジンブレーキも併用しつつ、インプレッサの4つのブレーキディスクが真っ赤になるほどのハードブレーキングを行い、ステアリングを進行方向に向かって切り込む。

するとインプレッサのリアタイヤはあっさりグリップアウトし、鮮やかにテールスライド状態へ移行。そしてそこからアクセル全開。フルタイム4WDの恩恵で4つのタイヤに駆動力が一気に伝達され、激しいスキール音を奏でながら4輪ドリフト体制へと入る。

「逃がさないぜ——」

22Bと比べるとコーナーへの進入速度は遥かに速い。しかしインプレッサの車体はアウト側に流されることなく、きつちりとイン側のクリップポイントを捉えて理想のコーナーリングラインを描く。フロントノーズとイン側ガードレールの隙間はわずからセンチ程度。文字通り最短距離を駆け抜けて、インプレッサはコーナーをフルスロットルで駆けていく。

「よっ、よっ……」

コーナー立ち上がりでアウト側ガードレールにテール部分をギリギリまで寄せた所で、一気にステアを逆方向へと傾ける。車の重心が急激に変わったことによりインプレッサのリアが暴れ出す。宮沢は

これを完全に制御してテール部分の流れる方向が変わった瞬間にカウンステアを当てる。

連続ヘアピン区間のため、右コーナーを抜けた瞬間に左エアピンコーナーが現れる。インプレッサはテールが流れた状態でそのままコーナー進入。いわゆる逆ドリフトというテクニクだ。

「嘘でしょ!？」

後ろのインプレッサの動きを、バックミラー内で確認していた真子は思わず驚きの声を上げた。彼女の知る限り、あんな芸当をやつてのける人物の心当たりは多くない。

圧倒的に速いコーナリングスピードで22Bに喰らいついてくるインプレッサに注意を払いつつ、真子はハイパワーを武器にしたコーナリングを続ける。

(立ち上がり加速を活かす走り……いわゆるスロイーン・ファストアウト走行か。まあハイパワーを活かすのなら、自然的にそういう走りになるよな)

2速ギアのままフルスロットルでコーナーを立ち上がるインプレッサ。22Bとの距離はさらに縮まる。

(それならば、こちらは――)

続いて宮沢の眼下に広がってくるのは右ヘアピンコーナー。通常ならばアウト側ラインである走行車線に車体を振るのだが、宮沢は前コーナー立ち上がりラインである反対車線からのラインのまま、ブレーキランプも光らせずに明らかにオーバースピードだと思える速度でヘアピンへとインプレッサを進入させた。

「いくらなんでも、突っ込み速度が速すぎるだろ!？」

「クラッシュするぞ!」

そんな光景を間近で見ていたギャラリーは目を見開き、突っ込んでくるインプレッサの動きに戦慄する。

(――ココだ!)

ちょうど道路が曲がり始める辺りで、宮沢はステアを一気に右へと切り込む。どう見てもオーバースピードでのコーナー進入であり、ギャラリーの誰もがクラッシュを予感した。

しかし、インプレッサの車体はそんなギャラリーの予想を嘲笑うかのように何事もなく、イン側の走行ラインを“土埃を巻き上げながら”駆け抜けていき、あっさりと22Bのテールにぴったりと張り付く。

「ど、どうなってんだ!？」

「絶対にクラッシュするかと思ったのに!」

ギャラリーは目の前で起こった出来事にショックを隠せない。そしてそれは、前を走る22Bの眞子も同じだった。

(低速ヘアピンで一気に後ろに来た!? 一体どうなってんのよ!)

4連続ヘアピン区間最後の左ヘアピンコーナーが見えてくる。眞子は後ろのインプレッサの動きが理解できないまま減速を開始するが、それがいけなかった。

(しまっ……!)

ブレーキングポイントを見誤り、理想ポイントより遙か手前で22Bのテールランプが赤く灯る。慌ててブレーキペダルを踏み込む脚力を調整する眞子だったが、後ろにいた宮沢はそんな隙を逃さない。

コーナー進入のイン側ライン、つまり22Bの左横にインプレッサの車体を滑り込ませて、きっちり理想のブレーキングポイントで減速開始。

(くっ……ラインの選択肢が……!)

一見するとほぼ横並び、しかし僅かにインプレッサのノーズが22Bの前へと出る。これによりライン取りの優先権は宮沢が取得し、眞子は走行ラインの選択肢を減らされてしまう。

(横に並ばれた……! でも、そのラインからじゃあ追い抜きは不可能なハズ……立ち上がりでアクセルをきっちり開ければポジションは守れる!)

パワーは22Bの方が上だ。コーナー立ち上がりを失敗しなければ、追い抜かれることはないだろう。

しかし眞子の思いはあっさりと碎かれ、ライン取りの制約でコーナーングスピードが低下した22Bを、インプレッサが悠々とやはり土埃を巻き上げながらオーバーテイクしていく。

(嘘でしょ!?)

横を駆け抜けて行くインプレッサの動きが理解できない。走行ラインの制約でコーナリングスピードが落ちたとはいえ、それでもインベタの苦しいラインを走行するインプレッサのスピードに見劣りするわけではない。

「くっ……!?!」

焦りからか、アクセルペダルを踏み込むタイミングが早くなってしまふ。コーナリングラインが少し外に膨らみ、インプレッサとの距離が開いてしまった。

(意外と上手くいったな)

このバトル中、初めてバックミラーに映る22Bの姿を見ながら宮沢が心中で呟く。

「ちよつと反則気味かもしれないが、峠の走り屋相手に負ける気なんて更々無いからな」

2台は4連続ヘアピンを抜けて、短めストレートを駆け抜けると、今度は先ほどの4連続ヘアピンコーナーよりも曲率の緩い連続ヘアピンコーナーが現れる。

ヒール&トウで素早く、そして確実に減速を行ってリアテールを振りながらコーナーを駆け抜けていくインプレッサ。

「さて、前に出たからには逃げさせてもらうぜ。プロの意地にかけてもな!」

インプレッサのテールランプの軌跡を目で追いながら、眞子も連続ヘアピンコーナーへと進入していく。

「何を仕出かしたかは分からないけど……こっちだつて地元の意地があるのよッ。このままあっさりチギられるもんですか!」

フェイントモーションからの4輪ドリフト。WRCばりのドリフト走行で22Bが連続コーナーを駆け抜ける。しかしインプレッサに追いつくには至らない。

バトルはいよいよ最終セクションへと突入していく――。

「それじゃあこのバトル、眞子は勝てないってことですか？」

コースの方へと顔を向けていたケンタに、音夢が質問をぶつける。
「さあ……それはどうかな」

含みのある笑みを浮かべて、ケンタは音夢の方に顔を振り向いた。
「確かにプロレーサーは凄い技術を持つてる。特に今走っている宮沢はトップドライバーとして有名だしな」

ケンタは近くの石垣に腰を下ろして言葉を続ける。

「だが峠とサーキットでは基本的に『走れる環境』ってのが違う。峠には峠の走り方ってのがあるんだ」

「峠の走り方……」

ケンタの言葉を音夢が呟きながら復唱する。

「サーキット競技のレーサーと、峠の走り屋では決定的な相違点がある。それはとても単純なことだ」

ケンタは顔をコースの方へ向けて、言葉を続ける。

「そして、このバトルにおいて最も重要なポイントになるはずさ——」

このバトルで、初めて見る相手のインプレッサのテールランプ。

(このまま離されるわけには行かないわよ！)

相手がどうやって自分をオーバーテイクしていったのかは理解できないうが、そんなものは頭の片隅に追いやって自分のドライブに集中する。

もうコースも残り少なくなってきた。このまま手を拱いていれば、敗北するだけだ。

(何が何でも……もう一度前に出る！)

若干長めのストレートで、3速へとシフトアップ。その後、大きく左へ回り込む穏やかなヘアピンコーナーへと突っ込んでいく。

バトル前に宮沢とケンタとがしていた会話で、相手のマシンはあまり大きく手を入れていない、ほぼノーマルに近い車であるということは把握している。

それに対し、こちらはエンジンパワーアップを施しており、暫定的なセッティングとはいえ足回りもそれなりに仕上がっている。ドライバーの技量では劣っているかもしれない、だがマシンの性能ではこちらに分があるはず。

(今更、相手がプロだとか関係ない。私は私の走りをするだけよっ！)
前を走るインプレッサのブレーキランプが赤く灯り、そのままコーナー出口へ吸い込まれていく。無駄なスライドを抑え、的確なコーナリングをしている。

続いて22Bがブレーキングを開始、ステアを一気に切り込んでリアを流していく。アクセルは全開のまま、とにかく脱出速度を速めることを意識したコーナリングだ。

(パワーはこっちの方が勝ってる。それなら、アクセルを踏める時間を少しでも長くする！)

この次は曲率キツめの右ヘアピンコーナー。そしてその後に見れるのは、初音山コース最長ストレートの高速区間。マシンの性能差を使用して追い抜けるポイントは、もうそこしか無いだろう。

先行するインプレッサのテールライトが、コーナーの曲がりに沿って揺らめく。眞子もヒール&トウで2速へとシフトダウンさせ、やはりアクセルを多く開けることを意識したコーナリングをさせる。

(行くわよ、22Bっ！)

コース最長のストレートが目前に広がり、そしてアクセルは全開へ。一気にレッドゾーンまで跳ね上がるタコメーターの針。レブリミットまできつちり回し、そしてシフトアップ。

パワーに勝る22Bが、先行するインプレッサとの距離をどんどん詰めていく。宮沢もそれをバックミラーで確認する。

「パワー差を活かしてストレートでねじ込んでくるか……」

宮沢のインプレッサもシフトアップ。だが22Bとの距離は確実に縮まっっていく。

(下り勾配がキツすぎてブーストが掛からない……。タービンがうまく仕事をしねえ……)

ブーストメーターに目をやりながら悪態をつく。こうなればエン

ジンパワーが物を言う場面だ。後ろの22Bがどんどん迫ってくる。
(行ける……確実に追いついている！)

近づいてくるインプレッサの後ろ姿。真子の闘争心に、更に火がつく。シフトレバーはすでに4速に入っており、どんどんスピードを乗せていく。

「……………ッ」

パワー差からくるストレートスピードの違いは歴然。22Bのノーズがインプレッサの左側から並びかけてくる。宮沢はブロックラインを意識していたが、この直線には対向車線に登板車線が存在するため道幅が3車線分と広い。そのため左右どちらかに、確実に横並びになれるスペースがあるためブロックラインは意味がない。

それならばコーナー進入の際、イン側の走行ラインを守ることの方が重要。そう考えた宮沢は、走行ラインはそのままの状態を維持する。

(登板車線のお蔭で俺は2車線分の道幅を使える。パワーの差はどうにもならないが、コーナーリング速度ならば対抗する事が出来る……が)

——

ちらりとサイドミラーに映り込む競争相手を見ると、22Bはすでに車体半分のところまで迫っている。

(イン側に切り込んでいけば、当然相手側にも走行ラインの余裕ができる……)

2台の目前に、大きく右に曲がる高速コーナーが見えてくる。インプレッサのブレーキランプが赤く光り、その一瞬後に22Bのブレーキランプも赤く点灯する。

そしてほぼ同時に2台ともからシフトダウン音が聞こえ、これまたほぼ同時に2台のステアリングが右に切り込まれた。

(ッ……若干アンダー気味か……！)

インプレッサのステアリングから伝わってくる感触が、少し心許ない。フロントタイヤが外へ流れる予感がした宮沢は一瞬だけブレーキを緩める。インプレッサの姿勢が若干崩れるが、少しカウンターステアを当てることにより軌道修正。だが、コーナーリングスピードは2

2 B に対して劣る。

ワンサイズ大きなタイヤを履く22Bは苦も無くコーナーリングを続け、そしてコーナー立ち上がりで22Bの車体がインプレッサの横に並ぶ。

「チツ……いー 行かせるかよツ……いー」

立ち上がりが若干ニブったインプレッサ。宮沢は思わず舌打ちをしながらもアクセルを踏み込み、22Bを前に出させない。

クロスミッションを積む22Bは、宮沢のインプレッサよりもシフトポイントが早い。そのため2台同時の立ち上がり加速では勝るが、代わりにシフトアップによる若干の息継ぎがある。

（流石に2速だとレブに当たっちゃうわね……いー）

シフトアップするかどうか——、次のコーナーまで判断に悩む微妙な距離。眞子は迷わずシフトアップを選択するが、やはり加速し続けるインプレッサに対して少し不利だ。

しかし次は曲率緩めの高速左コーナー。2台はほぼ横並びの状態のため、必然的に眞子の22Bがイン側の進入ラインを獲得できる。少々インプレッサに後れを取っていたとしても、コーナーアプローチは絶対的に有利である。

「くツ……いー」

2台同時に左コーナーへ進入すると同時に、宮沢の顔が渋る。ステアリングを切った角度に対し、コーナーリング角度が浅いことを感じ取ったからだ。

（タイヤ半分ほど外に流れるか……いー）

純正サイズ16インチのタイヤが音を上げる。DCCDでデフの駆動力をコントロールできないインプレッサは、アクセルを緩めてアンダーを消すしか方法が無い。

2台横並びで左コーナーを脱出。その際、3速ギアへシフトアップしていた22Bはもたつくことなく加速するが、2速ギアのインプレッサはレブリミットに当たってしまい、シフトアップ時の息継ぎで小さく失速してしまった。

（タイヤの残りグリップを考えると……この右の先、橋の上の高速左

コーナーが勝負をかけられるラストポイントになる……)
宮沢は横を走る22Bの姿を見て、そう思案するのだった――。

「どういうことだよ？」

頭に？マークを浮かべる音夢と美春の代わりに、純一がケンタへ質問する。

「ジムカーナ選手と峠道の相性バツチりだって言ったのはお前じゃないか？」

「確かに。だがそれは、あくまでもコースの造りが似てるっただけだ。サーキットでやるジムカーナ競技コースと峠道では、決定的に違うことが1つある」

ケンタは石垣に座ったまま、3人を見上げてニヤリと笑う。

「それは『対向車の存在』だ。完全クロードのサーキットコースは一方通行——つまり対向車の概念がないんだよ」

「——ッ!!」

ケンタの言葉を聞いた3人は、ハツとした表情になる。

「峠道は一般公道、つまり対向車がいつ飛び出してくるか分からない。峠の走り屋とサーキットドライバーの決定的な違いは、対向車に対する処理能力だ。」

もちろん峠の走り屋だからって、確実に対向車を処理できるわけじゃあない。だがそれでも普段から対向車の存在を意識した走り方をしているのとしていないのでは、その差はデカイ」

石垣から腰を浮かし、再びコースへと目を移す。

「初音山コースは最終コーナーが右の中速コーナー、つまり対向車がブラインドから飛び出してくる状況だ」

ケンタは3人の方へ振り返る。

「その右コーナー手前。コース唯一の3車線分のラインを描ける左曲がりの高速複合コーナーが、今回のバトルの勝負ポイントになるハズ。そこで前に出た方が、このバトルの勝者になる——」

2台同時に左コーナーを抜け、ほぼ直線と言った右コーナーを横並び状態で駆けてゆく。

「——来たか」

2人の目前に現れる、左へ曲がる高速複合コーナー。ケンタが指摘した通り、コース唯一の3車線分の走行ラインが描ける勝負ポイント。

(次の右コーナーで勝負は仕掛けられねえ……。ココが勝負どころ！)

両車ともシフトレバーの位置は4速ギアに入っている。クロスミッションのおかげで、22Bの方が若干スピードは乗っている状況だ。

「悪いがアウト側2車線分のスペースはいただくぜ！」

イン側からの進入ラインを走行する22Bに対し、宮沢はインプレッサを真横にピツタリと並走させる。真子の走行ラインの自由度を奪い、コーナリングスピードを遅くさせるのが狙いだ。

「ライン選択の苦しいイン側に追い込むつもりでしょうけど、お生憎様！」

真子はインプレッサの存在を意に介さず、そのまま高速コーナーへと進入してブレーキングを行い始める。

(——ッ、このラインで突っ込む気かよ……！)

隣を走行する22Bの走行ラインに驚きつつも、宮沢もブレーキングを開始した。

宮沢の乗るインプレッサよりも、真子の乗る22Bはブレーキキャリパーの容量と制動力が大きい。つまり2台同時にブレーキングを開始しても、22Bの方が早めに速度を落とせるということだ。

「コーナリング^{ライン封じ}がらせには慣れてるのよ！」

インプレッサよりも先にブレーキングを終える22B。前荷重姿勢のままステアリングを進行方向に切り込み、コーナリングを開始していく。

(チツ……。想像以上にタイヤのグリップが残ってねえ……！)

22Bよりもキャリパー容量が少なく、タイヤもワンサイズ以上小さい物を使用しているインプレッサは、痛恨のプッシングアンダーを誘発してしまう。

それにより、コーナリングへと移行するのが22Bよりも大幅に遅れてしまった。

(走行ラインの自由度はこっちに分があるが、旋回く立ち上がり速度は確実に向こうが上だ……!)

インプレッサに対して走行ラインの苦しい22Bだが、DCCDをリア寄りに設定しているお蔭で若干オーバーステア気味の姿勢を維持し、速度は低めだが軽快感のあるコーナリングを見せつける。

アンダーステアと格闘するタイヤのスキール音を響かせ、無理やり曲がる姿勢を作ったインプレッサではあるが、そのコーナリング速度は22Bに到底及ばない。

(しかもココは、出口に向かって曲率のキツくなるタイプの複合コーナー……)

既にタイヤのグリップが限界を迎えているインプレッサは、コーナー中腹からステアリングを切り込んでも、ただ無情なスキール音を響かせるだけで曲がって行こうとはしない。

少し前まで真横に居た22Bは、既に立ち上がりの加速姿勢に入っている。

「……ココまでか」

ふう、と小さく息を吐くと、宮沢はアクセルペダルから足を離す。

よしんば22Bに追いついたとしても、次はブラインドの右コーナー。対向車の存在が全く予想できない場所で勝負を起こそうという気は、彼には更々なかった。

失速するインプレッサを嘲笑うかのように、22Bはそのままの勢いで最後の右コーナーにテールランプの軌跡を残して姿を消していった――。

——宮沢インプレッサ失速。勝者、水越 眞子&22B―STi。

「お疲れさん」

頂上へと戻ってきた22Bとインプレッサのドライバー両名に、労いの声をかけるケンタ。

「ほれっ」

「ありがと。それよりも勝負の結果は聞かないの?」

純一から受け取ったスポーツドリンクを飲みながら、眞子はそんなことを問う。

「ああ。前後タイヤの溶け方で、まあ何となく結果は見えてるからな」

2台が帰ってくるなり、前後のタイヤを確認していたケンタは何かを悟った顔をしている。

とは言え、音夢と美春はきよとんとしていたので、苦笑しながら宮沢が勝負の結果を教えていた。

「しかしノーマルのインプレッサで眞子の22Bに喰らいつくとはな……流石はプロレーサーってトコか?」

「おや。知っていたのか」

「何となく、ドコかで見たことある顔だなとは思ってたからな」

先ほど音夢たちに見せた、自身のスマホに表示したページを宮沢にも見せるケンタ。

「うわー、デカく載ってるなあ……あの人、こーゆーのはちやつかり宣伝するんだなあ」

表示された自分の顔写真が載ったページを見て、思い当たるスポンサー先である1人の顔を思い浮かべながら少し愚痴る宮沢。

「プロとしてキツチリ勝たせてもらうつもりだったが、流石にタイヤとブレーキがノーマルじゃキツかったな。最後の方は止まりきれなかったし」

「ハンドルこじった様なタイヤの使い方からして、後半はアンダーステアと格闘してた感じだな」

「ああ。22Bのようなデフコントロールもないから、パワーオーバーにも持って行きづらくてねえ。というか、22Bがアレほど走れるとは思ってもみなかったよ」

宮沢が22Bと眞子の方を見ると、眞子が駆け寄ってくる。

「そういえばさ、4連続ヘアピンで私の22Bをどうやって抜いたのよ。しかも土埃あげながらとか意味わからないんだけど」

「ん? ああ、あれは道路と土手の境目にある縁石にタイヤを引つか

けて曲がったんだよ。サーキットジムカーナでも縁石内側にタイヤをワザと落とし込んでコーナリング中の遠心力を弱める事があるんだが、そのテクニックの応用ってトコだな」

宮沢がジェスチャーを加えながら、眞子の質問に回答する。

「そんな曲がり方があっただなんて……」

「はい。美春もビックリです！」

音夢と美春が宮沢の説明を聞いて驚く。

「なるほどね、縁石内側に溜まった土手の上を走ったから土埃が上がったわけね」

「そんな無茶するヤツが他にも居たとはな……」

納得する眞子と怪訝な目をする純一。彼の頭の中には、似たようなことを仕出かした知り合いの顔が思い浮かんでいた。

「まあ最終的には負けたワケだけだな」

宮沢は苦笑しながら、自分のインプレッサに乗りこむ。

「今日は楽しかったよ。またドコかで会ったら、またよろしく頼むぜ」
「ええ、今度はもつと戦闘力のある車乗ってきなさいよ？」

「次は勝たせてもらうよ、それじゃあな」

眞子と宮沢がお互いを健闘すると、インプレッサはゆっくりと駐車場を後にした。

「——もしもし、宮沢です。アレはちよつと大きく出過ぎじゃないッスかねえ」

初音山を下りながら、宮沢は誰かと電話をしている。アレとは、先ほど見せられたページについてだろうか。

「まあ良いですけどね、こっちは車貸してもらってる身ですし……。ええ、先ほど走り合ってきましたよ」

口元を緩める宮沢。久しぶりの公道レースで、すこしテンションが上がってしまったようだ。

「中々やりますよ、正直言う競り負けましたし。どうですか、旅行ついでに行ってみたら。桜も嫌になるほど咲き誇ってキレイですよ」

電灯に照らされる桜の花びらを見ながら、宮沢は電話相手にそんな

ことを言う。

「それに同じ匂いを感じましたから。いやいや、いい意味で、ですよ」
苦笑しながら電話を続ける。

「ええ、それじゃあ」

宮沢は通話を終わると、携帯を助手席側に放り投げた。

「面白くなりそうな予感がするぜ、初音山の走り屋さん達」
彼はそんなことを車内で小さく呟いた――。

A c t . 1 2 遭逢

「マズい、非常にマズい」

そろそろ朝日が顔を出し始める早朝。

そんな時間に、初音山の山頂駐車場で1人の男性——朝倉 純一は、自らの置かれていた状況をそのような言葉で表した。

「車は動かせない、携帯も電池切れ、こんな時間だから人が来るとは思えない。そんな中、ショップの開店準備をしなければならぬ」

愛車の傍らで空を仰ぎながら呟く。

彼の愛車である真っ黒のエボ3は、足元のブレーキキャリパーからモクモクと煙が上がっている。

一応、こんな時間に初音山へやって来る知り合いに心当たりはあるのだが、今日は休みのはずだ。

「あれ、これ詰んだんじゃないか？」

八方塞がり——。

まさにそんな言葉がピッタリ合うこの状況に、純一は自嘲するしかない。

一応、こんな時間に初音山を登ってくる知り合いに1人心当たりはあるが、予定では今日は来ないはずだ。

「……まさかブレーキが死ぬとは思わなかったんだ。いやだってさ、一応ブレンドキヤリパーだぜ。許容量は充分あるはずなんだよ」

誰に言い訳をしているのであろうか、彼は誰も居ない駐車場で1人言葉を紡いでいくが、それに応える者などいない。

ただただ動けなくなった愛車が、静かに鎮座しているだけだ。

「やべーなあ……今日ケンタは遅く来るから、店のカギ持ってる俺だけってコトになるもんなあ……」

手に持った、勤務先の店を開ける鍵束を見て溜息を吐く。

初音オートの従業員は、順番で開店準備——と言ってもショップの開錠をするだけだが——をすることになっており、今日は純一の担当日であった。

開錠の担当が遅れるということは、必然的に他の従業員が店に入れ

なくなり、もちろん客も入店できないのでショップの開店自体が出来ないということだ。

「……かつたるい」

学生時代からの口癖がふと出てしまう。

「仕方ねえ……歩くか」

それしか方法がない。流石に徒歩では時間的にもう間に合わないが、少しでも足掻く方が言い訳ができる。

そう考えた彼は、エボ3をドアロックし、覚悟を決めて道路の方へと目をやる。

「……ん？」

その時、1台のエンジンサウンドが駐車場に近づいてくるのが聞こえた。

一瞬知り合いかとも思ったが、特にマフラーを交換しているような大きなサウンドではなく、至って普通の車の音だ。

知り合いでなくとも初音島の走り屋ならば見知ったヤツも多いため、この状況を何とか出来るかもしれないと思った彼だが、流石に普通の一般車となると話は変わってくる。

こんな時間に話しかけても、向こうは警戒するだけだろう。

(やっぱりか……)

駐車場に入ってきたのは、特に車高を落したりマフラーを交換している様子の無い、至って普通の白色のステーションワゴン。

そしてその車を見て、純一は人知れず肩を落とす。少しでも改造しているようであれば、まだ話しかけやすいキツカケを作れそうだったのだが。

しかも島外ナンバーであるところを見ると、いわゆる普通の観光客の可能性が高い。流石に声をかける気にはなれず、ヘタをすれば不審者扱いされてしまいそうだ。

「あれはムリだな……」

落胆した呟きを漏らす純一だったが、彼の思いとは裏腹にそのワゴン車はエボ3の横へ停車する。決して広いとは言えない山頂駐車場だが、それでも彼のエボ3以外に駐車車両の姿はない。

そんな中わざわざ、エボ3の横にワゴン車は駐車したのだ。普通のドライバーなら、まずそんなことはしない。

若干そんなワゴン車の動きを訝しんでいると、ワゴン車からドライバーが降りてきた。

「どうも、ココの地元さんかな？」

メガネをかけた男性が声をかけてくる。恐らく自分よりも年上だろうが、純一が引つかかったのはそこではなかった。

(地元さん……?)

その言葉を使う人種は限られてくる。しかも相手は島外ナンバーのドライバーだ、はつきり言って違和感があった。

「他に車も止まってねえし、そのランエボが愛機かな。まあ満身創痍って感じだが」

若干皮肉にも聞こえる男のセリフだが、スラスラと並べた単語に、純一はこの男が同じ人種だと確信する。

それと同時に、どこかで見たことのある顔だとも思った。

「しかしこんな時間に走り込みか。随分と熱心だが、ストリートでキヤリパーの限界超えるまでブレーキ踏んでも仕方ねーぞ。それで動けなくなっっちゃ世話ねえからな」

「……まあ色々とありまして」

ようやく言葉を返す純一。自動車の専門用語をスラスラ並べるところか、走り屋の世界でしか使わない言い回しをする男に、今度は純一が少し警戒することになった。

「まあオレも昔はムチャクチャやってたから、他人の事はあんま言えねーけどな。気を付けろよ、無理だと思ったら素直に止めることがストリートで生き残って行く秘訣だからな？」

「……肝に銘じます」

若干、押しつけがましいセリフに純一は内心面倒くさいな、と思う。とは言え、相手は間違いなく同じ人種だ。ただの観光客よりも話は通るだろう。

「あの、少々お願いがあるんですが……」

「ん？ 近所のショップまで車で送って欲しいってトコか？」

今まさに言おうとしたことを、先に相手に言われてしまう。

「その通りですけど……どうしてわかつたんですか？」

「そりやお前、ブレーキがあんな状態なら自走できないのは明白だしな。それにエボ3に貼ってるそのステッカーが、オレの言ってるショップの看板と同じだしな」

積車呼ぶより自分で積車乗ってきた方が手っ取り早いってコトだろ——と付け加えた男。

まるで全て見透かされているようで、若干不気味だった。

「ただ道はわかんねえから、隣でナビしてくれよ」

「それはもちろん……でも、本当に良いんですか？」

ワゴンの助手席のドアを開けてくれる男に尋ねる純一。

「だってお前……流石に歩いていくのはキツイだろ」

「……ですね」

「だろ？ ほれほれ、遠慮すんなって」

男に促され、純一は苦笑しながらワゴン車に乗り込む。新車の匂いがまだするあたり、納車したてなのだろう。

「急いだ方が良いよな？」

「え？ まあ、急いでもらえた方が助かりますけど……」

「よし。それならちゃんとしートベルト締めとけよー」

男はイグニッションボタンを押してエンジンを始動させると、間髪入れずにアクセルを全開。

白色のすーてーションワゴン車——スバル V M G型レヴオーグ S T Iは一気に加速し、助手席に乗っている純一はその加速感からシートに押し付けられる。

「まあ急ぐと言っても、あんま道知らないから6割程度で行くけど勘弁してくれなー」

強烈に加速していくレヴオーグの車体の動きとは裏腹に、男は近場までドライブする雰囲気と言い放つ。

流石に自分の乗っているエボ3に比べると加速感は弱いが、それでもノーマルの、しかもステーションワゴン車と考えれば凄まじい加速力だ。

(おいおいマジかよ……何もイジってなさそうで、オマケに納車したばっかの雰囲気的車だぞ……!?)

普通に考えれば、男はまだレヴォオグに慣れていないと考えるのが普通の状態だ。そんな中、ドライバーである男は迷うことなく速度を上げていく。

「確か最初は高速S字からの中速左ヘアピンだったかなー」

レヴォオグの目前に、男の言うとおりのコースが出現する。

男は相変わらずアクセル全開のまま最初のS字コーナーへ進入していくが、助手席の純一は顔を強張らせる。

(アクセル全開で進入だと……!?)

確かに最初の左は曲がれるかもしれないが、次の振り返しの右コーナー、そしてその後に現れる左ヘアピンに対応できない速度になる。

純一の脳裏にはクラッシュの映像が浮かんだ。

「よっ、と」

左コーナーを曲がりきったところで、男は一気に左足でブレーキペダルを踏み込む。

レヴォオグはS字コーナー振り返しの右コーナーをインベタのラインでクリアし、そしてそのままの勢いで左のヘアピンコーナーも、綺麗なアウト・イン・アウトの走行ラインを描いてクリアしていく。

(あり……えねえ……! あoの速度域から車体を不安定にさせることなく曲がり切れるなんて……!)

レヴォオグのアシストグリップを握りしめながら、純一は男のドライブに戦慄する。

はつきり言つて、そこらの走り屋車よりも強烈な横Gが襲い掛かってくる状況に、頭の整理が追いつかない。

「あんま道知らないし車もナラシが終わったばっかだから、言うほどスピード出せないけど勘弁してくれなー」

相変わらず男はリラックスした声色で、純一に声をかける。ハイスピードで流れていく背景とはあまりにもミスマッチだ。

(嘘だろオイ……まだ余裕を残してこの走りかよっ……)

次いで右コーナーを駆けて行くレヴォオーグの車内で、純一は必死で横Gに負けじと体勢を保つ。

彼が知っている走り屋の中でも、ここまでのドライブをする人間はそう多くはいない。

「くうっ……!?」

高速の左コーナーでレヴォオーグのリアが若干振られるが、それでも前へ前へとスライドしていく車体の動きは、純一が今まで体感で覚えてきた一線を超えていた。

(すげえ……ぜっ、何者だよコイツ……!?)

横Gが激しく襲い掛かってきているが、男の車両操作自体は非常に丁寧で無駄がない。

ほとんど切れ角を変えないステアリング捌きと素早いパドルシフトワークで、レヴォオーグはしっかり路面を捉えそして地面を蹴り出す。

左足ブレーキなどという高等テクニクを躊躇なく行える辺り、相当の手練れと考えていいだろう。

(この人……間違いなく本物だぜ……!)

純一は横目で、ステアリングを穏やかな表情で握りながらも、激しい走りをする男を見て確信する。

レヴォオーグは勢いそのままに、一気に初音山を下って行くのだった。

「朝倉君、大丈夫……？」

「ずっとその調子だけど、お前マジで大丈夫かよ」

昼休みに突入した初音オート。ショップ内の事務所の机に突っ伏して純一に、ことりが心配そうに声をかける。

あのお気楽な性格なケンタですら、ことり同様に心配そうな声色を出すほど、純一はぐったりとしていた。

「あー……まあ仕事は出来てるから」

ゆっくりと体を起こし、2人の方へ向き直る純一。

とは言え流石にこの状態で整備作業は難しいので、事務作業へと業務チェンジしてはいるのだが。

「朝からそんな調子だけど、何かあったの？」

「ちよつと……な」

あいかわらず心配そうな顔をすることり。純一は今朝の出来事を思い出す。

あのレヴォーグのドライバーに初音オートまで送ってもらった方がいいが、初音山を下り終わり街中に入ってもその勢いは止まらなかった。
た。

(街中の交差点を4輪ドリフトで駆け抜ける経験なんて初めてだぞ……)

そのおかげで思っていたより早く店に到着できたのだが、その過激すぎる走りによって純一はほぼノックアウト寸前。

走り屋のプライドとして平然を保ってはいたが、レヴォーグのドライバーに名前を聞きそびれる位にはキツイものがあった。

ちなみに山頂駐車場に置き去りにしたエボ3は、早めに出動してきた同僚に引き取りに行ってもらい、現在リフトの上で鎮座している。

「世の中にはヤバい奴が、他にもたくさん居るつてのを思い知らされた朝だったぜ……」

「何だそりゃ？」

純一は目の前に居る、その他多数の“ヤバい奴”を見ながらそう呟

くのであった――。

――同時刻。

「話には聞いていたが、不思議な島だよなあ……」

初音島の街中を走る1台の車――白色のレヴォオーグのステアリングを握るネガネをかけた男性が、そんなことを呟く。

「はえー……本当に桜ばっかりなんだねー……」

「ええ、素敵な光景ね」

レヴォオーグのリアシートに座る女性2人も、そんな初音島の街並みに溢れる桜の木々を見て感想を漏らした。

「神秘的って言えば聞こえはいいが、1年中桜が枯れないとか考えようによっちゃ不気味だぞ」

「色んな専門分野の学者が調査してるみたいだけど、未だにその原因は解明されていないみたいね」

黒髪の大人びた女性が、観光客向けの案内パンフレットに記載された説明文を見る。

「噂だと魔法使いさんの能力の根源が具現化したものだとか！」

「いや流石にそれはねーだろ」

緑髪の小柄な女性が嬉々として話すマンガのような設定に、ステアリングを握る男は苦笑しながら突っ込みを入れる。

「もー、お兄ちゃんは夢が無いなあ」

「仕方ないわよ、兄さんだもの」

「お前らココで車から降り出すぞ」

呆れた声の女性2人に、兄と呼ばれた男は半ギレの表情――と言っても演技だが――で返答した。

「それで？ 目的のお店はもう近いのかしら？」

「んーと……今朝確認してきたら、この辺りのはずだが……つと、あったあつた」

対向車線側に見える、目的地の店の看板を見つけた男はレヴォオーグをそちらへと向けて走らせる。

——それから十数分後。

「……マジかよ」

「……マジだね」

メガネをかけた男と小柄な女性は、目的地の店内で声を潜めていた。

2人の視線の先に居るのは、このお店の従業員と思われる女性スタッフだ。

「意味わからんくね?」

「いや、もしかしたら島内で流行ってるのかもしれないよ」

「だとしてもこの状況ではあり得ねえよ」

「ですよー」

2人の視線を釘付けにする女性スタッフは、いま現在は2人のツレである黒髪の女性と話している。

「……何でベレー帽被ってんだ?」

「……すごく似合ってるけどね」

その女性スタッフ——白河　ことりの頭にあるベレー帽に、2人はツツコミを入れざるを得なかった。

初音オートでは最早見慣れた光景なのでショップ常連や他のスタッフたちは気にも留めないが、初来店の客はこの2人のように物珍しい視線を送るのが習慣化されつつあった。

「それではこれより作業に入りますので、この札をお持ちになって、こちらのスペースでお待ち下さい」

「ええ、よろしくお願いするわ」

レヴォーグのカギと引き換えに数字の書かれた札を渡された黒髪の女性は、指定された待機スペースに備えられたソファア―に座る。

「なんでお姉ちゃんは一切のツツコミをいれずにいられるの」

「貴女と兄さんの相手してると、あれくらいは普通に流せるようになるわよ」

小柄な女性もソファア―に座り、姉と呼ばれた女性は軽く息を吐くとソファア―近くにある本棚から雑誌を抜き取り、ペラペラとページをめくって行く。

「オレはちよつと店内見学でもして来ようかな」

「行つてらっしゃい、時間が来たら電話するわ」

「あいよ」

男は2人を残し、サービスカウンター近くに居た店員を捕まえる。

「ココつてピット作業内見学つてOK?」

「作業エリア内への立ち入りは禁止ですが、ピット横に備えられたスペースで良ければ見学可能ですよ」

「じゃあちよつと案内してもらえるかな?」

「わかりました」

男は店員と一緒に作業ピットエリアへとやって来ると、ピット内がよく見えるような大きな窓が設置された部屋に通される。

「見学はこちらの部屋からお願いします」

「ん、ありがとね」

窓の近くに備えられた椅子に腰を掛けてピット内を見渡すと、少し離れた二柱リフトに載せられた1台の車を発見する。

(……軽傷だったようだな)

男は小さな笑みを浮かべると、ピット内で慌ただしく動き回る作業員たちを見つめた――。

日はすっかりと落ち静寂が街中を包み込んでいく中、初音山を登って行く1台の車の姿があった。

「感触はどう?」

「ローター研磨とパッド交換で済んだから、アタリさえ付けば問題ないな」

黒色のランエボ3の車内で、ステアリングを握るケンタが助手席に座ることからの質問に答える。

初音オートの営業終了後に純一のエボ3の整備を開始し、先ほど整備を完了させた2人は、試運転で初音山へと来ていた。

既にエボ3の調子は元通りになっており、若干速度を上げつつクルージング走行をしている。

「前のはちよつとグレード落としたブレーキパッドだったからなあ、流石に耐えきれなかったか」

「朝倉君の懐事情が良くわかるね……」

「この前、勝手にウチの在庫部品使いやがって給料から天引きしたからな」

苦笑しながら話す2人だったが、ふとバックミラーを見ると後ろからヘッドライトの光が近づいてくるのを、ケンタは確認した。

「どうしたの?」

「1台追い付いてくるのが居る」

ケンタにそう言われて、こつりもサイドミラーから後方を確認。そこには確かに1台の車が接近してくるのが見えた。

今ケンタとこつりが乗っているのは、純一のエボ3。初音オートのステッカーを貼っている車は初音山の走り屋間では有名で、またオーナーである純一本人も走り屋たちとは仲が良いので、そこまでちよつかいをかけてくる者は少ない。

「……ちよつとペースを上げるか」

ケンタはアクセルペダルを踏む足に少しだけ力を込めると、エボ3の心臓部である4G63が唸りを上げて車体を引っ張って行く。

だが、後方から来る車は相当スピードが乗っているのか、確実にエボ3の背後へと近づいてくる。

「……向こうはやる気みたいだよ」

後方から来た車はエボ3に向けて、短いパッシングを数回行う。走り屋間でのバトル挑戦という意味表示だ。

それに対して、ケンタはハザードを3回点滅させる。それはバトル了承の合図だ。

「あんまり気乗りはしねえが、ちょっと位なら遊んでやるよ」

ケンタはバックミラーを見ながらそう呟くと、2速までギアを落とすとしてアクセルペダルを全開にする。

「おっ、良いねえ。遊んでくれるってワケか」

悠然と加速していくエボ3を見て、後方よりパッシングを行った車——白いVMG型レヴォーグのドライバーである男は喜びの声を上げ、アクセルペダルを床まで踏み込んだ。

・バトル車両・

MITSUBISHI LANCER Evo. 3 (大城 剣太

& 白河 ことり) | V. S | SUBARU VMG LEVOR

G S T I | Sport (???)

バトルコース「初音山・登り・夜・晴れ」

バトルBGM「SUN IN THE RAIN (頭文字D AR

C A D E S T A G E Ver. 4 参照)」

バトルスタートの場所は初音ワインディング手前の少し長めのストリート。

「ッ……い！」

スタートと同時に、後ろを走るレヴォーグが車体を左に振ってエボ3をオーバーテイクしようという姿勢を見せる。

相手のバトル車両も相成り、流星にケンタも驚きの表情を浮かべた。

(スタートで一気に来るか……確かにレヴォーグ、しかもSTIモデ

ルなら戦闘力は高そうだな。とは言え……)

外見こそステーションワゴンのレヴオーグではあるが、ノーマルでも最大出力300馬力というそのエンジンスペックはランエボに勝るとも劣らない物だ。

スポーツリニアトロニックCVTという、スバル自慢のトランスミッションシステムで一瞬のタイムラグも無く速度を乗せていく。

「れ、レヴオーグ!?!」

助手席のことりも、相手の車種を見て驚きの声を上げる。

レヴオーグという車のスペックは知っているが、それでも峠を全開走行する車ではないという認識をしていた。

「峠で走り屋マシンのランエボに噛みついてくるのは良いが、それでも相手を選ぶべきだな」

ケンタはそう言い放ち、3速へシフトアップ。エボ3は一気に加速し、並びかけてくるレヴオーグを突き放す。

「おー、流石はランエボ。加速力が違うねえ」

ぐんぐん加速していくランエボの姿を見ながら、レヴオーグのドライバーは呑気な声色でそんなことを言い放つ。

「やっぱココはS#モードで行くか、せっかく地元の走り屋が遊んでくれるんだし」

ステアリングに設置されたスイッチを押し、そしてパドルシフトでギアを1つ下げる。

するとレヴオーグは更に強烈な加速を見せつけ、先行するエボ3をしつかり追従していく。

(さあ、地元の走りを見せて貰おうか)

2台の目前に現れるのは左の低速ヘアピン。

ケンタはヒール&トウでシフトダウンさせながら、少し早目のブレーキ制動をかける。アタリを付けたとは言え、流石にハードブレーキングを行うつもりはない。

その代わり、早めに車の向きを変えてアクセルを踏むタイミングを早くし、コーナー脱出速度を稼ごうとする。

「えッ!?!」

エボ3の助手席に座ることりが驚く。気が付けば、エボ3の左横にレヴォォグのノーズが入り込んでいた。

(こっちのブレーキが甘いことを知ってやがったのか……?)

横にレヴォォグが並びかけたことにより、強制的にアウト側の走行ラインへと追いやられるエボ3。思っている以上にアクセルを踏み込むタイミングを遅くさせられ、コーナー脱出速度はレヴォォグに及ばない。

そのまま前へと抜け出すレヴォォグを見て、ことりはとある事に気付く。

「島外ナンバー……あのレヴォォグって、今日お店に来てた車じゃない?」

「言われてみれば、確かにナンバーが同じだな」

ケンタが納得するのも無理はない。あのレヴォォグの作業を担当したのは、彼だったのだから。

「島外ナンバーが飛び込みのオイル交換作業ってコトでちよつと引つかかってたが、ただの観光客じゃあ無さそうだ」

前を走るレヴォォグを見据え、ステアリングを握る手に力がこもる。昼間見た限りでは、間違いなくフルノーマル車両。しかもほぼ新車という状態のはずだ。

(つまり相当手練れた乗り手だってことか……)

ギアを1つ上げて3速へシフトアップ。前を走るレヴォォグを追従していく。

ここから先は、高速コーナーが不規則に連続する初音ワインディング区間だ。

(とは言え、その凶体だと車重は相当重たいだろ。このコーナー群の横Gに耐えられるかい?)

レヴォォグが初音ワインディング区間に突入、左右に車体を振ってコーナリングを開始していく。

「おおっと、ステア操舵が忙しい区間だなコレは」

男は軽口を叩きながら右へ左へレヴォォグの車体を旋回させ、少々大きめのロールを起こしながらコーナーをクリアしていく。

標準モデルよりも締め上げられたサスペンションだが、初音峠仕様にセッティングされたエボ3に敵うわけではない。

徐々にレヴォオーグとエボ3の差が詰まってきた。

(流石にこの区間じゃこっちは有利だが、向こうは左足ブレーキを多用してアクセルを抜かずに車体を安定させてるな……)

思ったよりもレヴォオーグの動きが小さい事に、ケンタは素直に驚く。よほど車体をコントロールする技術が長けていないと、到底マネ出来ない芸当だからだ。

「かなり良い走りだね、あのレヴォオーグ」

「ああ、素直にスゲエと思うよ。こっちは様子見の車、向こうは峠道に不向きな車つてことが、少し物足りないと思うほどだぜ」

ケンタは口元をゆるませる。向こうのドライバーも恐らく同じ表情をしているのだろうか、と思いながらコーナリングを続けてレヴォオーグを追従していく。

エボ3よりもブレーキランプが点滅するポイントが多いレヴォオーグではあるが、それでも車体の動きは全く破綻していない。

2台の距離はそれほど離れておらず、やがて初音ワインディング区間のコーナー群を抜け、少々短いストレートのある高速区間へと進入していく。

「流石に立ち上がり加速はこっちの方が上か」

ストレートでの加速区間で距離をグツと詰め、エボ3とレヴォオーグはテールトゥノーズ状態へ。

「やるねえ……ソコまで詰めてくるのかよ」

バックミラーに映るエボ3の姿を見て、やはり男は軽口を叩く。

そしてストレートが終わる合図である高速の左コーナーが、2台の目前に現れる。

「おっと……」

レヴォオーグが旋回を開始するが、流石に高速コーナーでは車体重量故に動きがシビアだ。脇が甘くなったところを、エボ3がすかさず狙いに来た。

少しステアリングを切り込めばエボ3が飛び込むスペースを潰す

ことが出来る。しかし男はステアリングの舵角はそのまま、アクセルペダルを少々緩める。

イン側に車1台分が走行できるラインを残してコーナーリングするレヴオーグを、悠々とエボ3がオーバーテイクして再び前へ。

(随分と余裕だな……)

前に出たケンタは、バックミラーに映るレヴオーグを見ながらそう思う。

先ほどの高速コーナー、彼にレヴオーグを追い抜く気はあまりなく、精々コーナーへの進入速度で差を詰めて、多少のプレッシャーを与えるだけのつもりだった。

たまたま相手のインが開いたというよりも、半ば開けて貰ったスペースに飛び込んで前を譲ってもらった感触だ。

「今のって……」

助手席のことりも、先ほどのレヴオーグの動きが気になったのか、ケンタに声をかける。

「ああ、こっちの車速に合わせて走行ラインを譲ったな。まあ車両スベック的に無理をする場面じゃないという判断を下した可能性もあるが——」

バトル開始直後のブレーキングで追い抜いて行ったことを思い返すと、余力を残していると考えた方がしつくりと来る。

(——ん?)

不意に後方よりパッシングされてバックミラーを覗くと、レヴオーグがハザードを出してゆつくりと離れていくのが見えた。

(マシントラブル……じゃねえな)

走行ラインを譲った事を考えると、相手がただやる気をなくしただけか。減速体勢に入っているレヴオーグが徐々に離れていく。

「相手の車、離れるね」

「お互い全開じゃ無かったとはいえ、ちよつと不完全燃焼つてとこだな……まあ良いさ」

ケンタはアクセルペダルを踏み込みランエボを加速させていくが、減速していくレヴオーグの後ろに小さくではあるがもう一つ光源が

存在しているのを確認していた。

「——つたく、タイミングが良いんだか悪いんだかわかんねーな」
ランエボから離れていくレヴォォグの車内で、こちらへと猛烈に追いついてくる光源をバックミラー越しに確認した男はそう呟く。

『あら、それはどういう意味かしら？』

カーナビのハンズフリー機能で電話での通話が可能となったレヴォォグの車内に、女性の声が響く。

「言葉通りだ、さっきまで地元のランエボと遊んでたんだよ」

『……よくその車でランエボ相手にバトル吹っかけるわね、流石は兄さん』

電話相手の女性は呆れた声色。

「うるせー、このまま頂上行くだろ？」

『ええ、着いていくわ』

通話が終了し、レヴォォグともう1台の車は頂上を目指して初音山を登って行く——。

初音山の山頂駐車場。満員御礼とまではいかないが、今宵も走り屋たちの車で賑わっている。

「おつ、来たな……」

その駐車場に入ってくる黒色のランエボ3を見つけた、本来のオーナーである純一がそう呟いた。

「あつ。あそこだよ」

「アイツほんとに大丈夫なのかよ……」

エボ3の車内から純一の姿を発見したことりが純一の姿を指差すと、ケンタは車を純一の元へと近づける。

「仕上がったか？」

「まあな。とりあえずパッド交換とローター研磨で様子見ってトコだが、特に問題は無さそうだ」

ランエボから降車しながらケンタは純一にそう言う。

「そーいや割と踏んでた音が聞こえてたけど、お前が仕上がったばかりの車で飛ばすなんか珍しいな？」

「まあブレーキにアタリつけなきゃ駄目だったし、それに……」

ケンタはふと駐車場の入口に顔を向ける。

「——スゲエのと出逢ったからな」

彼の視線の先には、2台の車の姿があった。

1台はノーマル然とした白いV M G型レヴォーグ、先ほどまでバトルをしていた車両で間違いないだろう。

そしてそのレヴォーグの後ろから付いて来る車——青いB N R 3 4型スカイラインG T — Rには、ケンタだけでなく駐車場に居た走り屋の殆どが視線を送っていた。

レヴォーグと3 4 Rの2台は一度、入り口近くのスペースに駐車したがレヴォーグのドライバーがケンタに気付いたのだろうか。2台は再び動き出し、彼らの元へとやってきた。

「よお。また会ったな、ランエボのお兄さん？」

「……あっ!？」

レヴォオーグから降りてきた口元に笑みを浮かべるメガネをかけた男性を見て、純一が何かを思い出したように叫ぶ。

ことりはその真意に気付くと、純一に声をかける。

「もしかして朝倉君が工場まで送って貰ったのって、この人だったの？」

「ああ……」

そんな会話を聞いたケンタも口元に笑みを浮かばせ、レヴォオーグのドライバーに向き直る。

「ウチのスタッフがお世話になったみたいで」

「おいおい、ついさつきお前にも世話になったろ」

ケンタの言葉に苦笑する男。軽口を叩き合う2人だが、そこにお互い敵意は感じられない。

「おいおい、まさか割と踏んでた理由ってバトルかよ……」

純一は少し呆れた顔で2人を見る。片や仕上がったばかりの他人の車で、片や島外ナンバーの走り屋マシンとは程遠い車。

「バトルっていう程のモンでもねえけどな、ステーションワゴン相手に本気になる走り屋なんてそうそう居ないだろ」

相変わらず口元に笑みを浮かべる男性。随分と余裕があるという雰囲気だ。

「あら、その人たちとはお知り合い？」

ふと男に声をかける黒髪の女性。その横には、小柄な緑髪の女性の姿もある。

「朝に地元のヤツを隣に乗せたって話しただろ、それがその彼だったという事だけだ」

「あく……例の被害者の人かあ……」

小柄な女性は哀れみを込めた視線を純一に送る。

「人聞き悪いこと言うんじゃないよ」

「あはは……そちらの2人はお連れさんですか？」

ジト目で小柄な女性を見る男性に、ことりが質問をぶつける。

「ああ、この2人は妹だよ。この島に観光に行くって言ったら連れてけーってうるさくてな」

「どうも、妹その1よ」

「えつと……妹その2です!」

女性2人の自己紹介の仕方にも、初音島サイドの人間は少々苦笑いを浮かべる。

「しかし、この島はすげえな、マジで桜が咲いてるんだな。しかも島全体で」

「そうですね、でも私たちにとってはそれが普通になっちゃってますね」

「まあこの島に住んでるのなら、それが当然な反応だわな。そういや桜が枯れないのは魔法使いのせいだーみたいな噂が出てるけど、そんなウワサ流されてる方は大変だよな」

男が笑いながらそう言うと、初音島住人の3人は真顔になり一瞬だけ空気が凍る。

「ハハハ、ナニツテルンデスカー」

「ソナワケナイジヤナイデスカー」

「なにその棒読みセリフと能面みたいな笑顔!? まさかあのアホみたいなウワサってマジなの!?!」

ことりと純一の返答に慌てふためく男だが、さらにケンタが追い打ちをかけて行く。

「実はそれぞれの桜の木の下には島流しされた者の死体が埋められていてその死体から流れた血が桜を紅く染めて——」

「なにそれ!?! 違うベクトルで魔法使い云々よりヤベエ話が出てきたんだけど!?! 怖え! この島超怖えんだけど!?!」

「何を言ってるのよ兄さん、とても素敵なお話じゃない」

「たぶんそれは魔法使いさんがやっつけた犯人なんだよ!」

「お前ら何で話に食いついてんの!?! 何処が素敵な話なんだよ! 狂気しか感じねえわ! あとその犯人はどんな事件起こしたんだよ!

桜の木の下に死体埋められるとか意味不明過ぎるわ!」

ついさつき出会ったばかりとは思えないほど、なんとも賑やかな面々である。

「全く……兄さんってばホントに夢が無いわね」

「だねー」

「え？ 何？ オレが悪いの？」

釈然としない表情で男性は妹2人にツツコミを入れていく。

「ふふっ、とても仲が良くて微笑ましいですね」

そんな3人を見て、ことりは頬を緩ませながらそんな事を言う。

「そうか？ 絶え間なくボケられてツツコミが追いつかない、こつちの身にもなつて欲しいんだが」

男性は呆れた表情でそう返すが、声色には不満があるような感じはしない。

「いやいや。実は少し取つき難い人だと思ってましたよ」

こどりの隣に居たケンタが男性に向かって、口元に少しの笑みを浮かべて言葉を続ける。

「あの有名チェーンショップ“SPEED SHOP”の代表――
松山 健悟まつやまけんごさん？」

「……………ほう、まさかそつちから名前を出されるとはな」

「『この業界』で生きていて、貴方を知らない人はまず居ないでしょう?」

一瞬だけ面食らったような表情をした松山だが、その表情はすぐに先程と同じく飄々としたものに戻った。

「あらあら、すっかりバレてるわねー」

「お兄ちゃんはもう少し、自分が有名人だって自覚を持った方が良くんじゃないかなあ」

そんな松山に連れ人である女性2人が茶々を入れる。

「別に隠していたわけじゃ無いが——、お前も『同業者』ってワケか?」

松山はケンタ達に視線を戻しながら言葉を投げかけた。

「ええ。改めまして、初音オート代表の大城 剣太です」

「同じく初音オートのスタッフの白河 ことりです」

「メカニック担当の朝倉 純一です、今朝はどーも」

初音オート側の3人が自己紹介を済ませる。

「じゃあこちらも——。S P E E D S H O Pの松山 健悟だ、今は代表の地位を退いたけどな」

「妹その1、松山 萌よ。事務員という立場だけど、S P E E D S H O Pに所属しているわ」

「妹その2の松山 楓花です! 私は学生なんで、たまにお店のお手伝いする程度です!」

こちらは相変わらずの挨拶ではあるが、各々の自己紹介を済ませた。

「えっと、松山さんは代表の地位を退いたって…………?」

ただ一つ、気になる部分があったことは質問をぶつける。

「ああ、ちよいと前に代表者からショップの設立者って立場に移行してな。いわば『現役引退』ってトコか」

「そう言えば言葉は良いけど、ほとんどニートみたいな感じよね」

「今じゃあ完全に専業主夫だもんねー」

松山家の妹2人が笑みを浮かべながらそう話す。

「うるせーな、色々と手続きが面倒臭いから一応はまだ在籍してる形にはなってるんだから無職じゃねえよ。あとオレが家事しねえと色々滅茶苦茶になるだろうが、特に台所回りがな」

松山は妹2人をジト目で見ながらそんな事を反論する。

「そう言えばこの前も、お兄ちゃんが居ないときにお姉ちゃんが焼き魚作ろうとしたら消防車が家に来ちゃったよねえ……」

「うっ……あ、あの件は悪かったと思ってるわよ……」

楓花が遠い目をしながらそう言うと、萌はバツが悪そうな表情を浮かべた。

「……何かどこかで聞いたことある話だね?」

ことりが純一に対してそんな言葉を投げかける。

「そうだな、なんかめっちゃ親近感湧いたわ」

「いやどこに共感してんだよお前」

今ごろ家でくしゃみをしているであろう妹の顔を思い浮かべる純一に、ケンタが呆れた顔でツツコミを入れる。

そんなくだらない会話をしていた面々だが、ことりがふとした疑問を投げる

「そう言えば、松山さん達は何故この初音島に?」

「ん? さっきも言ったが観光だよ、観光。島中に桜が咲き乱れてて綺麗だぞー、って知り合いから聞いたモンでな」

あつけからんと言いつつ松山の声色に、偽りはなさそうである。

ただ初音島内で有数の観光スポットであるとはいえ、夜中の初音山へ来る人間はそうそう居ないだろう。

ましてや松山自身は早朝にも此処を訪れているというのだから、他にも何か思惑があるのではないかと、初音島サイドの人間が勘繰ってしまうのは当たり前と言えば当たり前だった。

「まあ実際の所は、観光だけじゃないってのも事実だけだな」

訝しまれている雰囲気を感じ取ったのか、松山は苦笑いした表情を浮かべて言葉を紡ぎ始める。

「少し前この山で地元の車とバトルしたつていう、腕が確かな知り合いから行って見たらどうだつて、ちよいと勧められてな」

松山の言う知り合いとは恐らく、先日眞子とバトルをしたGC8型インプレッサ乗りのジムカーナ選手の事だろう。

宮沢の所属するチームはSPED SHOPがスポンサーとなつていた筈である。

「つまり——敵討ちに来た、と?」

「別にそんなつもりはねえよ、ただ単純に興味が湧いたつてだけだ」

ケンタの鋭い視線を受ける松山だが、不敵な笑みを浮かべる。

「造り手として。そして、ドライバー乗手としてな」

松山の放つ言葉の意味。それをケンタが理解するのには、多くの時間が必要なかつた。

「何となくそつちも察してんだろ? じゃなきや、レヴオーグなんて大衆ステーションワゴン車からの挑発に乗るマネしねえよな」

「ですね、普段なら確実に無視決め込んでます」

無用な走りはしない——、それがケンタを良く知る人物が彼に抱いている印象である。

「まあ本当はさつき少し走つて、それで終わりにしようと思つたんだけどな」

松山は妹その1である萌の方をチラリと見る。

「あら、私の所為だと言いたいわけ?」

「半分はそうだな」

「じゃあもう半分は違つてことで良いわね」

その半分の理由を察した様子の萌は、ケンタに向かって笑みを浮かべた。

「造り手であり同時に乗り手でもある。お互い似たような境遇だからこそ——という訳ですか?」

「ああ。そんな人種には語り合うより、もっと手っ取り早い方法があるよな」

松山はそう言うと思ひエボ3の隣に停めてある、黄色いZZW30型MR—Sに視線を向けた。

「その黒いエボ3はそこに居る純一君の車だろ。その車をお前が乗って来たってことは、答えは一つしかねえよな？」

「——お察しの通りで」

ケンタは純一からMR—Sのキーを受け取り、それを松山に見せつけるのであった——。

「——楓花」

純一からMR—Sのキーを受け取るケンタを見ながら、松山は妹その2である楓花に声をかけた。

「はいはい」

今度は松山が楓花から車のキーを受け取り、それを初音島サイドの3人に見せる。

「なるほど、そういう事ですか」

「この展開で流石にノーマルのレヴォーグで走る気にはならねえからな」

松山が見せつけてくるキーには“GT—R”のエンブレムが埋め込まれていた。

レヴォーグの横に駐車している青いBNR34型スカイラインGT—Rに、周囲の人間の視線は移動する。

「あのGT—Rって楓花ちゃんの車だったんだ？」

「えへへ。元々はお兄ちゃんの車でしたけど、免許取ったお祝いに譲って貰ったんです。でも整備はお兄ちゃんにお任せ状態なんで、あの車の状態は完全に把握してるはずですよ」

ことりの質問に楓花が答える。

「まあそう言うわけで34Rで相手をさせて貰う。とは言え別にバカにするワケじゃあないが、これだと流石に車の差がデカいよな？」

松山は苦笑しながら黄色いMR—Sを見つめる。

「勝負はダウンヒルで横に並んでカウントダウンでのスタートじゃあなく、先行後追い方式でのスタートで行こう。先行はMR—S、後追いが34Rだ」

「それが車のハンデという訳ですか？」

「ああ。前の車が好きなタイミングでスタートして、それに後ろが続いていく。後ろの車は当然出遅れるが、それがエンジンパワーのハンデだ」

「わかりました。それじゃあ、先行で行かせてもらいますね」

ケンタはバトル方式に了承の旨を伝えると、愛車のMR―Sに乗り込んでスタート位置へと移動する。もちろん、松山も楓花の34Rに乗り込んでそれに続いていく。

「おいおい……マジでGT―Rとやる気だぜ」

「初音オートの代表でも流石にこれはキビしいんじゃないかねえか……?」

スタート位置に並ぶMR―Sと34Rを見て、駐車場から見学しているギャラリ―たちは思わずそんなことを言い出す。

周囲の人々の目をくぎ付けにしながら、黄色いMR―Sが数回空ぶかしを行った後にスタートダッシュを決めた。

そしてそれにワンテンポ遅れた形で青い34Rも一気に加速し、MR―Sの後を追っていく。

「さてこのバトル、どんな展開になるかしらね」

バトル開始となり小さくなっていく2台の姿を見つめながら、微笑を浮かべる萌は小さく呟いた。

・バトル車両・

TOYOTA ZZW30 MR―S (大城 剣太)―V・S―

NISSAN BNR34 SKYLINE GT―R (松山 健悟)

バトルコース「初音山・下り・夜・晴れ」

バトルBGM「STATION TO STATION (頭文字D
ARCADE STAGE Ver. 2 参照)」

「さて……まずはお手並み拝見と行こうか」

左に緩く曲がりそのあと右に切り返す第1コーナーへ進入していき、目の前を走る黄色のMR―Sを見つめながら松山は軽口を叩く。
(流石にパワー差がデカいから……軽さを活かしてコーナリングで差を付ける他ねえな)

バックミラーに映る34Rの姿を意識しつつも、ケンタはアクセル全開のまま左コーナーに進入しアウト側を通るラインを描いて、次の切り替えしの右コーナーへ。

ステアリングを一気に切り込み大げさな荷重移動を起こすと、MR―Sのリアはあつという間にブレイク。しかし慌てることなくカウンターステアを当て、コーナリング速度を極力落とさずに通過していく。

「ほお……良いねえ、中々やるじゃねえか！」

ほぼ速度を落とさずにコーナーを駆けて行くMR―Sの走りを見た松山は、おもわず称賛の声を上げる。

34Rの走行ラインはMR―Sと違い、少しアクセルを抜きタックインで左コーナーをイン側のラインで駆け抜け、次ぐ右コーナーはアウト側から大胆にステアリングを切り込んで堅実かつ速いコーナリングを見せる。

彼自身は走りの世界から身を引いて暫く経つのだが、現役の公道ランナーと比べても遜色のない技量であった。

「お姉ちゃん何してるの？」

2台のスタートを見送った楓花が、レヴオーグのリアラゲッジで何やらノートPCを操作している萌に声をかける。

「ちよつと色々だね……よし、繋がったわ」

萌に誘導され楓花はノートPCに映し出された画面を見る。

そこには地図上を赤い丸印が移動する画面と、黄色のMR―Sがヘアピンコーナーに進入していく映像が映し出されていた。

「何これ!？」

「34Rに搭載してるGPSレーダーと車載カメラの映像よ。これであの2人が何処を走っているかが良く分かるわ」

「い、いつの間にそんな物を……」

「面白いでしょ。貴方たちも見ろ？」

驚く楓花に涼しい顔で説明をしながら、純一とことりにも画面を見るように勧める萌。

2人が画面を覗きこむと、MR―Sがドリフト状態で左ヘアピンカーブを通過する場面が映っていた。

「ず、随分とハイテクな物を使ってるんですね……」

ことりも楓花と同じ様なリアクションを見せる。

「まあそのお蔭で2台の動きをリアルタイムで見れるのは確かに面白いけどな」

画面に映るMR―Sの動きを見ながら純一がそう言う。

「さてこのバトル、どういった展開になるのかしらね」

萌は画面を注視しながら、小さく笑みを浮かべた。

「なるほど、こりゃあ話に聞いた通りだ」

前を走るMR―Sが描くテールランプの軌跡を見つめながら、松山は感嘆の声を出す。

(スピンの速いMRミッドシップレイアウト車で、そこまでの旋回速度を出せるとはな)

少しでもステアリングの操作を誤れば即スピンするであろう速度域で、安定した姿勢でテールスライドさせながら走るMR―S。

(恐らく車重の差だろうがコーナー通過速度はこちよりも速い——いや、速すぎる)

ノーマルの状態ではあるがMR―Sと34Rとでは大雑把に比較しても、大体500キロほどの車重差がある。

もちろんお互いチューニングを施しているのでノーマル状態のそれよりも車重差は小さくなっているが、それを鑑みても明らかに

コーナー立ち上がり時の脱出速度”に差が出来てない。”
暫くMR―Sの走り後ろで見ていた松山は、どうにもその部分が腑

に落ちていなかった。

(予感は当たってるかも知れねえな)

松山はフツと小さな笑みを受かべて前を走るMR―Sを見つめる。
「流石だな……」

バックミラーに映る34Rの姿を見ながら、ケンタも松山同様に感嘆の声を上げた。

(コーナーリング速度はこっちの方が明らかに上なただけだな)

コーナー脱出時に後ろを引き離せることは確認していたが、それでも思ったより距離が開いていない。

細かくコーナーが続くセクションでマージンを稼ぐつもりでいた
ケンタにとっては、あまり好ましくない展開である。

(高速セクションに入るまでに、少しでも引き離さないとな……)

ケンタはそんなことを考えながら、シフトレバーを3速に叩き込み
MR—Sを加速させていく——。

「うーん……」

怪訝な表情を浮かべながらPCの画面を見つめる楓花。

その画面には相変わらず、凄まじい速度でコーナーを駆け抜けるMR―Sの姿が映っていた。

「どうしたの？」

楓花の表情に気付いたことが、彼女に問いかける。

「いや……別に大したことじゃないんですけど、お兄ちゃんがコーナーで離されるって珍しいなあと思って」

「松山さんはコースを熟知してないはずだし、それにGT―Rは車重も重たいし当然じゃないのかな？」

何処か納得のいかない声色で話す楓花に、ことが至極当たり前の言葉で返答する。

確かに地元の走り屋では無い松山が、コースを熟知しており地元でも指折りの走り屋であるケンタに追いつくことは難しいはずだ。

更に松山が操るGT―Rは車体が重い車種の為、軽量なMR―Sにコーナーリング速度で競り負けるのは仕方のない事だと分析することり。

「普通に考えたらそうなんですけどね……」

それは楓花が、兄である松山の「走り」をよく知るからこそその疑問だった。

「そうね、あの34Rで兄さんが先行車に距離を詰めていけないとは考えにくいわよね」

巧みなテールスライドでコーナーを駆け抜けるMR―Sの動きを、PC画面から目線を外さずに注視している萌も楓花と同じ感想を述べる。

「それともう一つ気になる事があるんだけど……」

「何かしら？」

今度はPCの画面から視線を外した萌の問いかけに、楓花は暗闇に飲み込まれていく道路の先を見つめながら言葉を紡ぐ。

「MR―Sってさ……『あんな音』してたっけ――？」

連続ヘアピン区間を軽快に駆け抜けるMR―S。それに少し遅れる形で34Rもその後を追うが、2台の距離はスタートした時よりも若干ではある物の明らかに離れていた。

コーナーを立ち上がる度、わずかではあるがMR―Sが34Rとの距離を稼いでいる。

(少し離され気味、か)

松山は前を走るMR―Sのテールランプを見つめながらそんなことを思うが、その顔に焦りなどと言った表情は見受けられない。

むしろ想定範囲内と言ったような、余裕のある表情にも見える。

(まあ流石にブレーキングが多くなるヘアピン区間じゃ、大人しく待つしかないよな)

重たい車体の34Rでハードなブレーキング競争を何度も行うのはリスクだと考えている松山は、ブレーキングからターンインにかけてはMR―Sに離されても我慢の走りを強いられることになる。

しかしコーナー脱出時の加速勝負はこちらに歩がある状況であり、コーナリングをトータルで見れば多少MR―Sに遅れる程度でさほど問題は無かった。

「とは言え、もし予感が的中してれば好ましい状況じゃねえよな」

これまでMR―Sの走りを見て、とある考えを持っている松山。

(この連続ヘアピン区間を抜ければ細かいコーナーが連続する区間。そこで予感が当たっているかどうかハッキリするな)

そう考える松山の目前に連続ヘアピン区間の終わりを告げる左ヘアピンが現れる。

先にコーナーへ突入したMR―Sは、フルブレーキングで一気に取りアを振り出しドリフト状態で駆け抜けていく。

(ここから初音ワインディング……そろそろ来るか?)

ケンタはバックミラーで34Rの動きに警戒しながらシフトレバーを3速に叩き込み、MR―Sに更なる加速を与えていく。

細かいコーナーが多いこの区間。右に左にと連続して車体を旋回

させる行為に関しては、MRレイアウトよりもFRベース可変式4WDシステムを持つ車両の方が有利だ。

現に後ろから追ってくる34Rはコーナリングの際に左足ブレーキを多用し、横方向への車体の動きを最低限に抑え込んでいるのか徐々にその姿が近づいてくる。

（やっぱり追いついてくるな……重たい34Rでここまで走れるものなのかよ）

予想はしていたが実際に目の当たりにすると驚きの感情を隠せない。

（流石はSPEED SHOP設立者の松山 健悟——、至高の公道ストリートランナーと称されるだけあるぜ）

バックミラーに映る34Rの姿を見つめながら今一度、バトル相手である松山の存在感を思い知るのであった。

「多分だけど、楓花の考えは当たってるわね。このMR—Sは間違いなく“ターボ化”されてるわ」

PCの画面に映る黄色いMR—Sの姿を見て、萌が衝撃的な一言を言い放った。

「やっぱり?」

楓花も自身が思っていたことに間違いがなかったと確信した様子で、PCの画面を見つめる。

いくら地元でコーナリング速度が速いとはいえ、MR—Sが松山が操る34Rの立ち上がり加速に対抗できるとは思えなかった。

「スタート加速時のシフトアップでブローオフの音がするなーとは思ってたんだけどね」

「1ZZ型エンジンのボルトオンターボ化は、MR—Sの基本性能そのままに大幅にパワーアップを果たせる最適な手段よね」

PCの画面ではMR—Sの姿が徐々に近づきつつあり、34Rとの距離が詰まっている。

「でも——どつやらターボ化だけじゃないみたいね」「え?」

画面に映るMR―Sの姿をしばらく見ていた萌は、再び衝撃的なことを言い放つと楓花をはじめ初音島サイドの2人も驚いた顔をした。「ふふっ、貴方たちのボスも兄さんに負けず劣らず、なかなか面白いことをするわね?」

PCから視線を外し、ことりと純一に向かつて微笑えむ萌に、楓花はこういうことなのかと尋ねる。

「楓花もMR―Sのエンジンサウンドが気になってたでしょ、私もスタート直後に少し不自然な音だなどは思ってたのよね」

「それはブローオフの音じゃなくて?」

「いえ、もつと単純よ」

視線を楓花から初音島サイド2人に向けて、萌は核心を突く質問を行った。

「あのMR―S、エンジンスワップしてるでしょ?」

右へ左へと細かいコーナー群を駆け抜ける2台。

後ろを走る34Rをドライブする松山は、先行するMR―Sの動きをじっくり観察した後、一つの結論を出した。

(なるほど、予想的中だ)

フツと思わず口元に笑みがこぼれる。

(あのMR―S、明らかに7000回転以上ブン回るエンジンを載せてやがる)

ノーマルのMR―Sに搭載される1ZZ型エンジンは、どちらかと言えば低速く中速をメインに造られたトルクフルなエンジンであり、高回転域でのパワー不足を感じる代物だ。

精々6000回転程度でパワーは頭打ちとなってしまう、ノーマルでの最高出力は140馬力と34Rに比べて半分である。

(1ZZにターボを装着しECUをキッチリやったところでプラス1000回転伸びるかどうかだ)

ターボ化していることはスタートダッシュを見て判断出来ていたが、それを踏まえても明らかに使用しているエンジン回転数の領域がMR―Sとしては異次元だ。

今走ってる初音ワインディングのコーナー立ち上がり速度を見て、予想は確信に変わった。

「つたく……まさかVTECブイテックエンジン載せてるとはなあ」

苦笑いする松山の口からはとんでもない言葉が出てくる。

VTECエンジン——つまりホンダのスポーツ車両に搭載されているハイパワーなエンジンだ。

(最初は2ZZかと思ったが、あれだけエンジンをブン回してるところを見るとK20A辺りか?)

2ZZ型エンジンもVTECエンジンと同じく回転数でカムを切り替えて高回転を狙えるスポーツ系エンジンだが、MR—Sのエンジン回転数はそれを余裕で超えていた。

その辺りを踏まえると、やはり行きつく先はVTECエンジン。それもノーマル状態でかなり煮詰められたK20A型エンジンになるだろう。

「まさかこんなバケモンが居るとは……面白いじゃねえか」

松山が34Rのコンソールボックスに埋め込まれたボタンを押すと、ピピツと言う電子音が短く鳴った。

それとほぼ同時に、2台の目の前に初音ワインディングの終わりを告げる、右に曲がる低速ヘアピンが姿を現す。

MR—Sが先ほどまでと同じく、フルブレーキングを行いドリフト状態でコーナーへと進入していく。

続いて34Rもコーナーへ差しかかるが、松山がニヤリと口元に不敵な笑みを浮かべると、34Rは今までとは全く異なる動きを始めた。

(なっ……!?)

先にコーナーへ進入していたMR—Sの車内で、ケンタは信じられない物を見たというような表情をする。

最早タイヤロック寸前といった状態からの凄まじいレイトブレーキングで、一気にMR—Sとの差を詰めた34Rがテールスライド状態でコーナーへと進入してくる。

(一気に差を詰めた!? いやそれよりも……!)

大柄な34Rのボディが横滑りしながらMR—Sに近づいて来るが、ケンタにとってそれは常軌を逸した行動に思えた。

MR—Sに比べても明らかにワイドなコーナリングラインを描いた34Rは、アウト側のガードレールまで吹っ飛んでいくが接触寸前で車体は安定し、そのまま全開でコーナーを立ち上がる。

結果的に、1つの低速ヘアピンコーナーでMR—Sと34Rの距離がかなり詰まる事になるのであった——。

「うおっ……!?!」

PCの画面を見ていた純一は、34Rのコーナーへの進入ラインに思わず声を上げてしまう。

画面越しからでも伝わるほどに、その動きは強烈なモノであった。「あちゃー、始まつちやっただね〜」

同じタイミングで画面を見ていた楓花は苦笑し、その反応は純一とは全く異なる物である。

「始まった、って……?!」

「お兄ちゃんの悪い癖ですねー」

ことりの質問に楓花はそう答えると、画面から目を離して萌の方を見た。

「思ってたより早かったわねえ……」

少々呆れた声を出す萌は、そのまま言葉を続ける。

「久しぶりに遊べる競争相手を見つけて、ちよつと熱が入ってるわね」「遊べる……?!」

萌が放った言葉のチョイスが引かかったであろう様子のことりを見て、楓花が萌にツツコミを入れる。

「お姉ちゃん、それは少し言葉足らずなんじゃ……?!」

楓花にそう言われると、萌は「ごめんなさいねと初音山サイドの2人に謝罪をする。

「決してあなたたちのボスを悪く言ってるつもりはないのよ。画面越しからでも相当な乗り手であることは理解しているわ」

PCの画面上で凄まじいコーナーリングを続けるMR—Sの姿を見ながら、萌は言葉を続ける。

「結論から言うと、今あの34RはFRの状態になっているのよ」

「え、FRですか!?!」

ことりは驚くがそれは無理もない事だった。まさかGT—RをFR状態に、それもバトル中に変更するとは通常であれば考えられない状況だ。

「あの34RはアテーサE―TSを強制的にキャンセルする回路を組んでいて、コンソールに設置されたボタンを押せば即FR化になるシロモノなの」

「完全にお兄ちゃんの趣味ですけどねー」

現在は楓花が搭乗する34Rではあるが、元々は松山の愛車だったことを考えるとそんなシステムが搭載されていても不思議ではない。「知ってると思うけど、アテーサE―TSは車体に取り付けられたセンサーがスリップを感知した際に、前後のタイヤへ最適な駆動力を伝えて車体をコントロールするシステムよ。その恩恵は計り知れず、かつてのグループAレース等でも猛威を振るっていたわ」

「でも今、松山さんの乗っている34Rはそのアテーサをキャンセルしてる状態なんですよ。なぜそんな強力な武器を捨てるようなマネを？」

アテーサE―TSの凄さは重々理解しているつもりなのに純一は、だからこそ松山がその機能をキャンセルしているのか疑問だった。

GT―Rという車の成り立ちを考えると、アテーサE―TSがあつてこそ高い戦闘力を誇るマシンだからだ。

「あら、さっき言ったはずよ。遊び相手を見つけた、ってね」

微笑を浮かべながらそう話す萌だが、純一とことりはあまりピンと来ていない様子であった。

「マジかよ……!?!」

一気に後ろへと喰らいついてきた34Rの姿を見て、ケンタは思わず声を上げる。

(なんてコーナリングだ！ ありえねえだろ!?)

ブレーキングからコーナリングの旋回で有利なのは軽量な車体を持つこちらである筈にも関わらず、たった1つの低速ヘアピンでその差を全て埋めてきた。

どう考えても常軌を逸した行動を起こした34Rの姿に理解が追いつかないながらも、3速へとシフトアップ。ターボ化されたZZZ型エンジンが唸りを上げ、MR―Sの車体は加速していく。

(この先は割とスピードの乗る高速区間だったな)

MR―Sのテールランプを見据えながら、この先のコース図を頭の中で展開させる松山。エンジンパワーで勝る34Rにとっては有利な区間に突入する。

イージーに抜き去るのであればこの区間でアクションを仕掛けるのが得策だろうが、相手はコースを走り慣れている地元の走り屋だ。当然、自車が苦手とするポイントは把握しているだろう。

現にMR―Sの走行ラインは、後ろから迫っている34Rの動きを牽制するかのような反応をしている。

(「普段の設定」じゃねえから思ったよりもパワー差は少ないみたいだし、ここは様子見だな)

松山は口元に不敵な笑みを浮かべ、34RはMR―Sの真後ろピツタリを走行する。

「……そもそも直線でブチ抜いたんじゃ面白くねえよな?」

誰に向かって言ったのか。軽口をたたきながら松山は4速へとシフトアップ、RB26型ツインターボエンジンが重たい34Rの車体を引つ張って行く。

「おいおい……あの黄色のMR―Sって初音オートの大城だろ!」

「ああ……間違いねえ。この初音山である初音オートの大城とタメ張ってるなんて……後ろの34Rは何モンだあ!」

たまたま路肩に停車して駄弁っていた走り屋2人が、高速区間をアクセル全開で駆け抜けていく2台の姿を驚いた表情で見送る。

(さっきのコーナリングでの車体の動き方……まさかFR化か!?)

流石はチューニングに精通している人間だと言うべきか。ケンタは先ほどの34Rの動きから真相に辿りつくが、しかし確証は得られない。

何せ走行中——増してやバトル中に、GTR最大の武器ともいえるアテ―サE―TSを捨てるなどという行為は、あまりにもムチャクチャであり少なくとも彼にとっては理解し難かった。

だが相手は「至高の公道ランナー」の異名を持つ、SPEED S HOPのボスである松山 健悟だ。何を仕出かして来ても不思議で

はない。

「——つたく……敵わねえよな」

最初に先行後追いハンデスタート方式を提案された時から薄々は気付いていたが、さり気なくこちらが有利になるよう調整されている。

この高速区間でもパワー差を活かしての追い抜きの気配をも見せて来ない辺り、もはや驚きを通り越えて呆れて笑ってしまう。

(……ふう)

このバトルに対する意識を変更し、心の中で深呼吸一つ。目の前に大きく右に曲がる高速コーナーが見えてくる。

「あつちがその気なら、こつちもソレ相応の『オモテナシ』をしねえとなー!」

吹っ切れたような、それでいて何処か嬉しそうな声色で己を鼓舞した後、ブレーキペダルを全力で踏み込んだ。

あつさりMR—Sのタイヤは4輪ともロックし、車体はそのまま横滑りを始める。

そして同時にアクセル全開、タイヤから白煙を上げてMR—Sは鮮やかにドリフト状態へ。

「……!」

そんなMR—Sの姿を見た松山は、直感的にケンタの走りが変わったのを理解した。

「やっぱり気が合いそうだなー!」

松山も嬉しそうな声を上げて、ステアリングを一気に進行方向へと切り込みクラッチペダルを一瞬だけ蹴飛ばす。

アテーサE—TSをキャンセルしFRとなった34Rは、その遠心力に耐え切れずあつさりとリアタイヤのグリップを失うが、松山はそんな事はお構いなしにアクセル全開。

2台は高速コーナーで車体を大胆にテールスライドさせながらも、高いスピードを保ったまま駆け抜けていく。

「あらら……2人とも完全にスイッチ入っちゃってるわね」

激しくテールスライドを起こしながらコーナーを駆ける2台の姿を、萌はくすくすと笑いながらPCの画面で見つめる。

「兄さんはともかくとして、MR―Sの彼も積極的に車を滑らせて走るスタイルなのかしら？」

「確かにドリフトを多用する走り方ですけど、ここまで大胆に滑らせているのは中々見ませんね……」

萌の質問にことりが答える。彼女が知っているケンタの走りは、ドリフトを多用するスタイルと言っても、どちらかと言えば高回転域をキープするために車を振り回している印象だ。

ここまで大胆に、はつきりと言えば無駄なテールスライドを起こすような走りはしないはずだ。

しかし、そんなことに純一は待ったを掛ける。

「いや……そうとも限らない。俺が走り始めた頃、アイツはこんな走り方をしていたような気がする」

ケンタに次いで、仲間内では比較的早めに初音山を走り出した純一。

PCの画面に映るMR―Sの走りは、当時の事を思い出すと何処か重なる部分があった。

「という事は……いま画面に映ってる走り方が、ケンタ君の本来のスタイルってこと……？」

「ああ、恐らくな」

PCの画面には、ドリフトコンテストかと見間違うかの様な走りをする2台の姿が映る。

「シヨップの運営が軌道に乗り、仲の良い連中が次々に走り始めるようになっていたりして、いつしか無意識的に走りをセーブしていたのかもな」

軽く見えるけど責任感は強いしなど、学生時代からことりよりも長く付き合いのある純一は言葉を付け加えた。